

第16回九州地区国立大学間合宿共同授業報告書

<https://doi.org/10.15017/21688>

出版情報：九州地区大学一般教育研究協議会議事録. 16, 1991-11-29. 九州大学教養部
バージョン：
権利関係：

第16回合宿共同授業を顧みて

九州大学教養部長 原 田 博

第16回九州地区国立大学間合宿共同授業は、九州・沖縄の各国立大学の教職員40名、学生87名の参加を得て、7月12日から16日、爽やかな清涼の気につつまれた、九重共同研修所で行われた。

雄大な万年山や湧蓋山を右に見ながら、バスが九重高原を走り、筋湯温泉にたちこめるあの懐かしい硫黄の匂いにふれた時、昨年の合宿共同授業からもう1年が過ぎ去ったのかという深い感慨にとらわれた。この1年間、昨年の経験をふまえて関係大学の教職員、特に当番大学の長崎大学の教職員の方々は、企画、実施について様々な努力を積みあげてきたのである。霧雨に煙る共同研修所の建物を眺めながら、今年の合宿共同授業の成功を祈らずにはおれなかった。

本年のメインテーマは、「九州・沖縄—その文学と風土—」と設定された。このメインテーマに沿って、11人の先生方による特色ある個別講義が用意されたが、オーガナイザーの福田先生の周到な御配慮で、それらは時代と地域という二つの軸によって系統的に配置されていた。メインテーマと個別講義との関連は、準備段階から常に私たちの関心事のひとつなのだが、問題意識のある学生諸君なら、この個別講義の配列に一定の系統性を読みとったにちがいない。

個別講義に関連して序でに言えば、11の講義の中、10までが同一時間に2つの講義を行なう併行講義であった。この点に本年の特徴があったと言えよう。昨年はじめての試みとして4つの併行講義を設け好評であったが、それを一挙に2倍以上に増やしたのである。講義題目の多様化と、少人数講義の導入という点できわめて有意義であったが、共同研修所のスペースを考えれば、それを限界ぎりぎりまで活用したカリキュラムであったと言えよう。

フォーラムは「九州・沖縄地域の文学—伝統と可能性—」として、基調発題者に作家の森崎和枝氏、長崎市在住のブライアン・バークガフニ氏、熊本大学教授の荒木尚氏という、フォーラムのテーマにふさわしい方々をお招きし、フォーラムを充実することができた。また特別講義は著名な火山学者、松本種夫氏で、先生の講義は、九重周辺の民間伝承、祭祀行事から、九州・沖縄全域の山岳、森林に及び、その強烈な個性によって学生に深いインパクトを与えた。学生の感想文の中に、それぞれの先生方から受けた感銘が記されているのを読むと、正に「教育は人なり」という感を深くする。

私は例年、4泊5日の全日程を学生諸君と寝食を共にするのを常としてきたが、今年は大学の会議の都合で残念ながら2泊3日で日程を切り上げざるを得なかった。したがって全日程を総括した感想を記すことはできない。しかし学生諸君のアンケート結果をみると、80%近い学生が合宿共同授業に

満足していると答えている。この結果でみる限り、本年も又全体として成功したと総括してもいいのではないかと思っている。学生諸君のアンケート結果に多くみられるものは、教官と学生が大学のちがいをこえて、短期間ではあれ、ひとつの共同体を形づくり、知的、人間的交流を深め得たという率直な感想である。それは様々な表現で語られているが、個性ある先生の講義を直接に聴けて感激したというものから、人との出会いの不思議を語ったもの、自分の人生は変わったという素朴な感動の表明まで千差万別である。合宿共同授業冥利につきては言うてよいだろう。

しかし他方、せっかく合宿共同授業に参加していながら、受身の関わり方に終始し十分にこのような講義・討議形式を活用していないかにも見える学生もみられた。共同授業の総括は単に数字に表わされたパーセンテージだけでは判断できない難かしさがある。

恒例の九重登山は生憎の雨で実現できなかったが、牧の戸峠まで有志の学生の登山が行なわれた。小雨の中の、しかも途中までの登山であったが、参加した学生の多くがそれでも楽しかったという感想をこもごも語っているところを見ると、九重登山に寄せられていた期待の大きさがわかる。これはせっかく九重という大自然の真只中にいながら、過密なカリキュラムで周囲の自然環境にふれる機会が少ないのは残念だという多くの感想と符合するものであろう。このような要望にこたえるには、技術的に難しい問題があるが、考慮すべき内容をふくんでいるように思える。

最後になりましたが、企画段階から1年間にわたって御尽力いただいた本年度の当番大学である長崎大学の三村教養部長、オーガナイザーの福田益和先生、教務委員長の生野正剛先生、多くの教職員の皆様にご心から御礼申し上げます。またあわせて合宿共同授業に参加された各大学の教職員の皆様にも御礼申し上げます。



マティアス・ソイターの日本地図

合宿共同授業体験記

長崎大学教養部長 三 村 珪 一

今回初めて九重の合宿共同授業を全日程にわたって体験した。もう16回目になるというのに、今まで一度も参加する機会がなかったのだが、これはもともと性格的に、このような行事に参加することがおっくうで気が進まなかったからである。しかし、今回は当番校なので、参加には是非がないうえ、当番校としての責任まで加わっての参加となったため、実際にスタートするまでは、正直のところ気が重く、ゆううつであった。ところがどうだろう。実際に体験して帰って来たら、出かける前の、あのゆううつさはどこかへ吹き飛んでしまっていて、合宿中の気分の高揚が、しばらくは納まらなかったのである。このことは、合宿共同授業がそれなりに成功を収め、かつ有意義であることを実感したためであると言えるのではないだろうか。このような効果を持つということは、合宿という方式が教育上きわめて有効な方法であると言えよう。その反面、内容や運営、それに参加者いかなんでは、この方式は両刃の剣のおそれの可能性もあることにも留意すべきであろう。

ところで、今回の合宿共同授業は、オーガナイザーの先生方の絶大なご努力のおかげで、統一テーマ「九州・沖縄 - その文学と風土 -」に凝縮され、見事に一貫した総合講義ができて上がったと言える。講師の先生方の参加も多く、余儀なく並列開講をせざるをえなかった面はあるが、テーマに従った一貫性のある授業群が編成されたと思っている。

下界の暑さに比べ、標高1000メートルに近い研修所は、ほどよい涼しさで快適であった。しかし、天候の方は、よほどの雨男か雨女が参加者の中にいたらしく、合宿期間中、半日だけ雨が上がった時があっただけであった。おかげで学生諸君は文字どおり、丸4日、研修所と山の家に缶詰にならざるをえなかった。こうなると、若いエネルギーの発散は、酒を飲むぐらいしかなく、だんだん溜まって、少々大げさに言えば暴動でも起こりかねないのではないかとさえ心配した。しかも、登山の日は、さらに雨がひどくなり、土砂降りの様相を呈した。登山の代わりに、その時間を埋めるために、特別講義をお願いした山口大学の松本先生が、依頼された講義以外にお持ちくださった何100枚もの楊子江源流や南極のスライドを使って、体験談をお話くださった。学生諸君は、先生のユニークな話しぶりとともに、ふだん見ることのできない景観をたっぷり堪能させていただくことができた。しかし、学生諸君の中には、どうしても缶詰状態に耐えられない人がおり、また琉球大学の学生諸君は沖縄ではこんな高い所は経験できないと非常に残念がっていたため、原則的には松本先生の話をお聴きすることとし、希望者のみ出かけることとした。その結果は、教職員を含め42名もが参加することになり、雨の中を

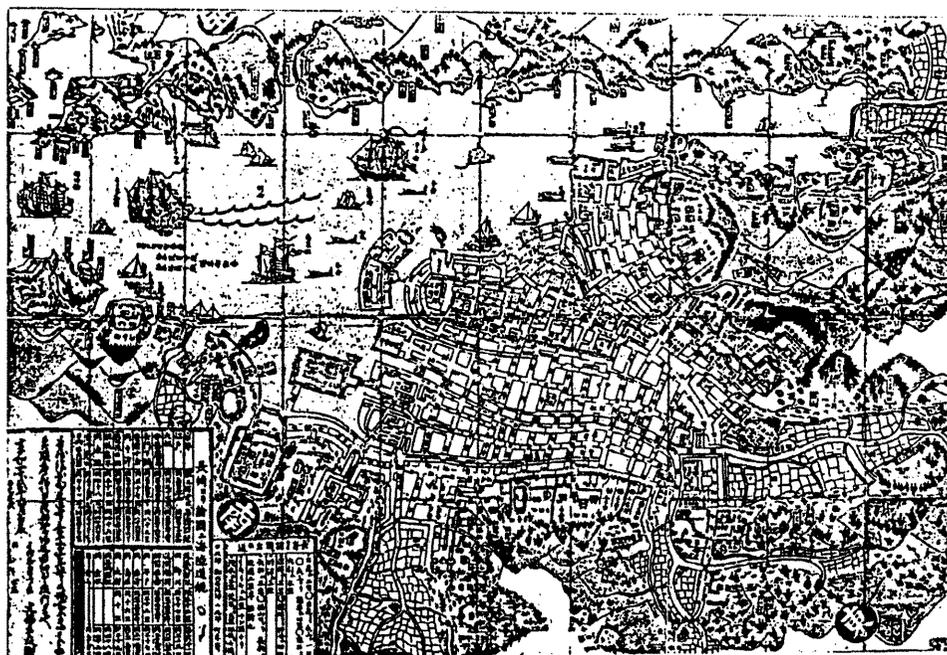
元気に、しかも和気あいあいと楽しそうに歩き、無事に牧ノ戸峠まで往復して来た。歩く距離は僅かで散歩のようなものだったが、十分に気分転換の効果はあったようだ。

その夜の恒例の懇親会は、各大学思い思いに知恵を絞っての出し物を披露し、喝采を博した。圧巻は琉球大学の踊りで、そのすばらしさには感動してしまった。その後、若い体力にまかせての飲みっぷりも拝見させてもらったが、心配することも起こらずに最後の日を迎えた。

たいてい翌日は、飲み疲れで意気も上がらないと聞いていたが、さにあらず、学生諸君は朝7時から起き出して、一斉に掃除を行い、しかもその後の全体討議もけっこう発言が多く、中には講義の内容や仕方に対する厳しい意見も出た。総じて、活発な討議で有終の美を飾ったといえるであろう。

とにかく、連続5日間の合宿共同授業を終え、学生諸君はそれぞれ新しい知己も得て、名残を惜しみつつ解散した。学部と異なり、不特定の大勢の学生を相手にしているわれわれ教養部の教員にとっては、こういった学生との接触の機会が持てたことは、教員と学生との相互の理解のためには非常に有益だったと思っている。

最後になったが、無事に一つのイベントを終了することができたのは、原田教養部長をはじめとして主管校の九州大学、参加された各大学の先生方、教務委員の先生方及び事務官の方々、それに自主的に協力して下さった世話人をはじめとする学生諸君、こういった皆さんの献身的なご努力のおかげであり、心からお礼を申し上げるしだいである。



享和2年肥州長崎図（長崎県立図書館蔵）

I. 第16回九州地区国立大学間合宿共同授業 実施要項

1. 目的 九州地区国立大学の学生と教官が一堂に集まり、寝食を共にしながら研修することによって、学生と教官並びに大学間の交流を深め、かつ、同一テーマについて多面的に授業をすすめることを目的とする。
2. メインテーマ 「九州・沖縄—その文学と風土—」
3. 主管 九州大学教養部
4. 当番 長崎大学教養部
5. 会場 九州地区国立大学九重共同研修所
大分県玖珠郡九重町筋湯〈TEL .09737-9-2617〉
6. 開催期間 平成3年7月12日(金)～7月16日(火)の4泊5日
7. 参加資格 九州地区国立大学に在籍する学生（教養部を置く大学は教養部学生）で当該大学が指定する者
8. 募集人員

福岡教育大学	4人
九州大学	15人
九州芸術工科大学	5人
九州工業大学	3人
佐賀大学	10人
長崎大学	10人
熊本大学	10人
大分大学	5人
宮崎大学	5人
宮崎医科大学	3人
鹿児島大学	10人
琉球大学	15人
鹿屋体育大学	3人
計	98人
9. 日程 別紙日程表のとおり

10. 講義・フォーラム題目等及び講師

○ 講 義

(1 A) 「文学の風土と風景論」	佐賀大学助教授	五十嵐 勉
(1 B) 「王朝和歌と九州の歌枕」	大分大学講師	妹尾 好信
(2 A) 「平家琵琶と幸若舞」	福岡教育大学教授	笠 榮 治
(2 B) 「琉球文学と日本文学との交流」	鹿屋体育大学助教授	長 友 武
(3 A) 「対馬藩の文学」	九州工業大学教授	石川 八 朗
(3 B) 「沖縄の文学」	琉球大学助教授	関 根 賢 司
(4) 「近世九州の俳壇」	鹿児島大学教授	大内 初 夫
(5 A) 「近代地方文壇の成立と展開」	九州大学助教授	花田 俊 典
(5 B) 「地方文学の発生」	宮崎大学教授	岡 林 稔
(6 A) 「長崎街道と近世紀行」	福岡教育大学教授	板 坂 耀 子
(6 B) 「北原白秋とその風土 —「五足の靴」を中心に—	熊本大学教授	首 藤 基 澄

○ 特 別 講 義

「九州・沖縄の自然と風土」	山口大学教授	松 本 徑 夫
---------------	--------	---------

○ フォーラム

「九州・沖縄地域の文学 —伝統と可能性—	基調発題者：作家	森 崎 和 江
		熊 本 大 学 教 授 荒 木 尚
	長崎市国際課嘱託	ブライアン・ バークガフニ
	司 会 者：福岡教育大学教授	昆 豊
	九州大学助手	齊 藤 篤 司

11. 参加申し込み

- (1) 参加希望者は、当該大学の担当係へ参加費（9,000円）を添えて申し込むこと。ただし、既納の参加費は原則として払い戻しをしない。
- (2) 当該大学は、参加学生名簿及び教職員滞在計画書を5月31日(金)までに当番大学あてに送付すること。
- (3) 参加費は、大学ごとに一括して第1日目に会場で払い込むこと。

12. 参加費（食事及び雑費）

9,000円（7月12日(金)夕食から7月16日(火)昼食まで）

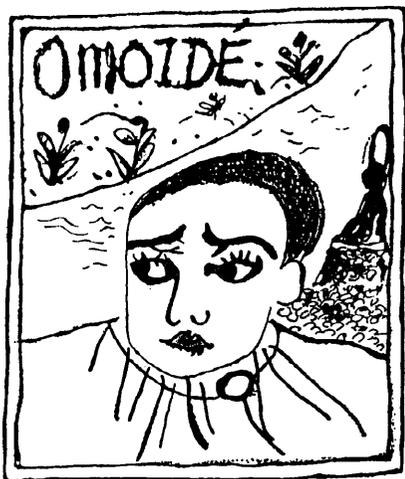
13. 単位の認定

当該大学の授業の一部と見なされるが、単位を認定するか否かは、各大学の判断において行う。

ただし、認定することのできる単位数は2単位までとする。

14. その他

- (1) 持参品 筆記用具、ノート、洗面具、着替え類、パジャマ、登山靴又は底の厚い溝のある運動靴（履きなれた物）、長袖、長ズボン、セーター、登山帽、雨具（折りたたみ傘とポンチョ又はビニールカップ）、水筒、Gパン等、手袋、健康保険証（コピー）、日常使いなれた薬など。
- (2) 集 合 参加者は、各大学ごとにまとまって、7月12日(金)午後4時までには会場に集合すること。
- (3) 解 散 7月16日(火)午後1時に現地で解散するが、参加者は借り上げのバス及び船舶で各大学まで輸送する。



北原白秋『思ひ出』挿画

第16回九州地区国立大学間合宿共同授業 日程表

平成3年度

時	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22		
第一日目	7月12日(金)	朝 食	講義(2A) 平家琵琶と幸若舞 福教大 笠教官	休息	講義(3A) 対馬藩の文学 九工大 石川教官	昼 食	車中オリエンテーション	受付 自由時間 教官打ち合せ	講義(1A) 開文学の風土と 風俗論 佐大 五十嵐教官	夕食	夕食	自由時間 教官打ち合せ	夕食	オリエンテーション 交歓会	自由討議	自由時間	消灯就寝	
第二日目	7月13日(土)	朝 食	講義(2B) 琉球文学と日本 文学との交流 鹿屋大 長友教官	休息	講義(3B) 沖縄の文学 城大 関根教官	昼 食	講義(4) 近世九州の俳壇 鹿大 大内教官	講義について の討議I	自由時間 教官打ち合せ	夕食	特別講義 松本講師	自由時間 教官打ち合せ	夕食	特別講義 松本講師	自由討議	自由時間	消灯就寝	
第三日目	7月14日(日)	朝 食	講義(5A) 近代地方文壇の 成立と展開 九大 花田教官	休息	講義(6A) 長崎街道と 近代紀行 福教大 近坂教官	昼 食	講義について の討議II	自由時間 教官打ち合せ	自由時間 教官打ち合せ	夕食	講義について の討議II	自由時間 教官打ち合せ	夕食	登山指導	自由討議	自由時間	消灯就寝	
第四日目	7月15日(月)	朝 食	講義(5B) 地方文学の発 生 宮大 岡林教官	休息	講義(6B) 北原白秋とその 風土一五足の 「柳」を中心 熊大 首藤教官	昼 食	登山 (ス ポ ー ツ) 九大 齊藤教官	自由討議	自由時間 教官打ち合せ	夕食	懇親会	自由時間 教官打ち合せ	夕食	懇親会	自由時間	自由時間	消灯就寝	
第五日目	7月16日(火)	朝 食	全体討議	全体討議	全体討議	昼 食	昼 食	全体討議	全体討議	全体討議	全体討議	全体討議	全体討議	全体討議	全体討議	全体討議	全体討議	全体討議

II. 第16回九州地区国立大学間合宿共同授業 講義要旨

○講義

(1A) 「文学の風土と風景論」

五十嵐 勉 (佐賀大学助教授)

文学と風土を考える場合、文学の舞台・背景としての地域（空間）の特性が問題となるであろう。例えば、寒暖・乾湿などの気候風土、地形の襲、中央と地方（辺境）、都市と農村（都鄙）、あるいは北と南のイメージなどの地理的環境の違いがそれである。

いま文学と九州の風土を論じるに、「九州的」な要素を明確に指摘することは容易なものではない。しかしながら、九州にこだわらず他地域での多種多様な文学作品に描かれた環境や風景の描写、あるいはそれによる感情移入のあり様を個別に読み、それらを相互に比較することで、九州における文学と風土の関わりについて考えることは可能であろう。

ここでは、歴史の諸時期において、いくつかの文学作品に描かれた九州各地の都市空間や農村空間の描写から、その「九州的」な文学の風景を人文主義的地理学的手法から解説していく。具体的には、江戸期の紀行文、近代以降の小説や詩歌などを取り上げる予定である。

(1B) 王朝和歌と九州の歌枕

妹尾 好信 (大分大学講師)

古来和歌に詠まれた名所を特に「歌枕」と称している。すでに『万葉集』にも多くの地名を詠み込んだ歌が見られるが、『古今集』以後の王朝和歌において、名所歌枕は和歌的伝統の中で確立したと言ってよい。これら歌枕の所在は畿内を中心として、北海道・沖縄を除く全国に広がっているが、とりわけ九州は、都から遠隔の地であるがゆえに、陸奥国と並んでかえって都人の関心と憧憬を集めたようである。そこで、本講義では、平安中期に能因法師が編んだ『能因歌枕』と、同じく後期に藤原清輔が著した『和歌初学抄』という二つの歌学書を手掛りにしつつ、九州の歌枕が詠み込まれた平安時代の和歌を具体的に採り上げて読んでみることによって、王朝の歌人たちが九州のいかなる名所に関心を寄せ、どんな風に詠んでいるかを考える。また、併せて、実際に九州を訪れた王朝歌人とその足跡についても紹介したい。

(2 A) 平家琵琶と幸若舞

笠 榮 治 (福岡教育大学教授)

平家琵琶は平曲とも言う。平家物語に琵琶独特の曲節を付けて語られる。琵琶法師と言う盲僧集団の専業でもあったことは周知の通りである。平家琵琶は琵琶法師によって全国に口唱伝播され、平家物語の受容に、文字を媒介としない文学享受の方法を確立したと言える。

幸若舞は全国で福岡県に唯一残っている芸能である。平家琵琶の型式(詞章+曲節)に新たに所作事を取入れた室町時代後期の典舞の一種である。楽器の鼓に合わせて武士の世界を素材にした物語を謡い、勇壮な箇所は謡い手が舞い巡る。

平家物語・幸若舞の共通素材「扇の的」「那須与一」を対象に武士的好尚の変遷を看るとともに、その音楽性等についても考えてみたい。なお、幸若舞の一節が有名な織田信長の最後に謡う「人間五十年～」でもある。

(2 B) 琉球文学と日本文学との交流

長 友 武 (鹿屋体育大学助教授)

琉球文学を代表する組踊(日本本土の能を琉球風に創作した作品)を資料にして、その台詞は琉歌(886形式)から成り立っている。日本の和歌が57577形式であるのに対して、琉歌は琉球独自の楽器三線を使ってリズムをとり、それにあわせて朗詠する。

琉歌は恋の歌が多く、万葉集の歌などの類似点が多い。琉歌と万葉、古今、新古今集などを比較検討し、琉歌の独自性と和歌との関連について考えてみる。他に、九州方言と琉球方言との関係、また日本本土の文学の琉球への伝播、影響について論じてみる。

(3 A) 対馬藩の文学

石 川 八 朗 (九州工業大学教授)

対馬は、九州と朝鮮半島の間位置するところから、歴史的に日朝関係に重要な役割を荷ってきたが、江戸時代には、対朝鮮外交の実務と貿易の独占が認められていた。

対馬藩では、元禄期、木下順庵門下の雨森芳洲や松浦霞沼を登用して、外交等のことに当らせた。

雨森芳洲は、中国語、朝鮮語に通じていた人で、日韓外交上の慣例となっていた朝鮮通信使の応接に、正徳、享保の二次にわたり、江戸へ同行した。この朝鮮通信使は、徳川將軍襲職の賀を目的として朝鮮国王が派遣した使節団で、その中には、詩文によって対応する役目の製述官が居り、対馬から江戸への旅中、随行の対馬藩の儒官や各地の学者たちと筆談や詩の唱酬を行った。

この度は、正徳の通信使来聘の折の筆談、唱酬の集で、雨森芳洲編の『稿紵風雅集』と、享保の折の、製述官申維翰の紀行『海遊録』から、使節と芳洲らとの交流の様相について述べる。

(3B) 沖縄の文学

関根賢司(琉球大学助教授)

(1) 琉球弧

ヤマトウ(本土)とウチナー(沖縄) 南島奄美と沖縄 琉球 首里王府 島津入り 琉球弧とヤポネシア

(2) 琉球方言

柳田国男 ネフスキー 折口信男 伊波普猷 P音考 三母音

(3) 国文学と琉球文学

国文学 万葉集とおもしろさうし 漢詩・和歌・琉歌

(4) 琉球文学と沖縄文学

神歌と島歌 組踊 琉歌 近代文学

(4) 近世九州の俳壇

大内初夫(鹿児島大学教授)

江戸時代、約3世紀にわたる平和と、それにともなう庶民の生活の向上につれて多くの庶民文化が興隆した。その中で最も庶民的で全国各地に広く流行したのが俳諧である。俳諧作者は各地にグループをなして存在しており、これを俳壇と呼ぶ。近世九州の場合、鎖国日本の唯一の貿易港長崎をひかえていた関係で、まず同地往返の人々によって俳諧が伝播された。その後、九州地方俳壇は絶えず中央俳壇の影響下に流行進展していった。中央の俳壇の主なる運び手は所謂行脚俳諧師であるので、ここでは多くの行脚俳諧師の動向に注目しつつ、九州俳壇の蕉風化の問題や、野波流・美濃派・蝶夢系・八千坊系などの主要流派の流行の様相について眺めてみる。

(5 A) 近代地方文壇の成立と展開

花 田 俊 典 (九州大学助教授)

福岡市の近代百年の文学的動向を概観する。福岡市に着目するのは、ひとつのゆるやかなエリアのサンプルにすぎない。概観してみたぶん見えてくるであろうのは、今日の文学史の大概がイメージするほどには小説がすべてではなく、むしろ詩や短歌・俳句のほうが大きな位置をしめている。

ここではいくつかのエピソードを通してその軌跡を辿ることにする。たとえば柳原白蓮、石川淳、壇一雄、矢山哲治らの名前も上がることになると思う。また、吉岡禅寺洞を中心とする俳誌「天の川」の動向、その他にも話題は及ぶかと思う。

(5 B) 「地方文学の発生」

岡 林 稔 (宮崎大学教授)

昭和十年代に「地方文学」あるいは「農民文学」が集中して生まれている事実は何を物語っているのだろうか。しかも、その幾つかが「芥川賞」やその候補作品として注目を浴び、いわば本来マイナーなものがメジャーな取り扱いさえうけている。

これは、小林多喜二の拷問死に象徴されるプロレタリア文学への官憲による弾圧、および「転向」作品としての「生産文学」・「国策文学」の観点から究明しなければならない。

しかしながら、そこから明らかになる「地方文学の発生」は、例えばアメリカにおける「ローカル・カラー文学」とは、その「地方の主体性」においてまるで正反対の現象としてとらえられる。本講義は比較文学的観点からも日本における「地方文学発生状況」を検証してみたい。

(6 A) 長崎街道と近世紀行

板 坂 耀 子 (福岡教育大学教授)

近世の九州紀行は数多い。その多くが長崎にたちよっている。三百年にわたる徳川幕府の鎖国政策の中であって、長崎は唯一開かれた海外への窓であり、町全体が独特な雰囲気の人々をひきつけていた。今日の海外旅行をするような意識もあって、人々は異国情緒を求めて、この地を訪れたもののようにである。

近世の紀行文は、旅先の土地の様子や人々の風俗を客観的に細かく描写しているものが多く、長崎の町の様子や、そこに至るまでの街道のさまもかなり細かく知ることができる。いくつかの近世紀行をとりあげながら、当時の旅人たちの九州や長崎や、旅についての意識を考えてみたい。

(6B) 北原白秋とその風土 — 「五足の靴」を中心に —

首 藤 基 澄 (熊本大学教授)

国民詩人として詩・短歌・童謡等に天馬空を行く活躍をした北原白秋は、熊本県の南関で生まれ、福岡県の柳川でその豊かな感性を育んだ。「私の郷里柳河は水郷である。さうして静かな廃市の一つである。自然の風物は如何にも南国的であるが、既に柳河の街を貫流する数知れぬ溝渠のほひには日に廃れてゆく古い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。(略)水郷柳河はさながら水に浮いた灰色の枢である。」(「わが生ひたち」という名文は、今もわれわれのこころをかき立てる。白秋は明治40年の夏、与謝野鉄幹・木下杢太郎・吉井勇・平野万里を九州へ招き、五人で柳川、唐津、平戸、長崎、天草等を巡遊した。それを契機に清新でエキゾチックな南蛮文学が生み出され、明治末、大正初期の文壇に大きな衝撃を与えることになった。本講では「五足の靴」を中心に、白秋における風土の問題を考察してみたい。

○特別講義

「九州・沖縄の自然と風土」

松 本 徑 夫 (山口大学教授)

与えられたテーマは、あまりにも広くて大きい。そこでいくつかの地域について、テーマに関係して述べてみたい。

先ず九重山は私の心の故郷である。若き日に、九州大の山仲間と替え歌として作った「坊がつる讃歌」は昭和27年のことである。これも九重山の四季の移り変わりや、その自然が創らしめたと思っている。九重山に隣接する阿蘇カルデラと中央火口丘、あるいは祖母・大崩山群は、それぞれ異なった生い立ちをもつと同時に自然景観も異なる。阿蘇鷲ヶ峰にザイルをさばき、奥祖母の原生林に宿り、九重の出湯と草原に旅情を感じつつ、九州の岳人は育ち、やがてヒマラヤや南極に向かうこととなる。屋久島、トカラの火山島、南海の珊瑚礁の島じまなど、すべてすばらしい自然と風土をもっている。

そこに育んだ人たちは、それなりの文化を創り、守ってきている。それが故に、その地域の自然と文化を尊重しなければならない。

○フォーラム「九州・沖縄地域の文学―伝統と可能性―」
―九州におけるノンフィクション文学―

森 崎 和 江 (作家)

フィクションによることなく、事実にもとづきながら社会や人間性を追求する文学はまだ新しい。九州においてもその通りで、ことに地元在住のまま文学表現をこころみことは、さまざまな障害があった。いわば村社会の秩序を乱す者ともいうような批判が、文学への志の初期にはつきまとうのが常であった。

それらの障害に根気よく堪えながら、一般庶民の諸問題に風を通した人びとの仕事を紹介したい。九州の風土の閉鎖性と開放性。その年代的な動き。地域差などにもふれ、かつ、男女間の対応の変転にもふれることができれば、と思っている。

「九州・沖縄地域の文学―伝統と可能性―」

荒 木 尚 (熊本大学教授)

九州といっても、その内実をつかむことは地図でみるほどに簡単なものではない。かつて古代九州をおおう言葉として「つくし」という言葉があった。そしてその中でも太宰府の占める政治的・文化的な規制力は最も強く長く存在したが、その一方で筑前・筑後・肥前・肥後・豊前・豊後・日向・薩摩・大隅の九ヵ国がもつ地域性も無視できない。そのような歴史的風土をふまえて、九州という地域単位の文学をとらえることは、古典を研究する私にとっては、近代と違ってきわめてむずかしい。従っていくつかの視点を取上げて考えることにするが、太宰府を中心とする連歌、琵琶法師の分布、九州諸藩の文庫が所蔵する文学遺産の内容とその発掘などにふれて、その実態の確認から伝統と可能性を考えてみたい。文化は自給自足のない土地には育ち残らないことを押さえるならば、考えるべき問題は明らかになるだろう。

「九州・沖縄地域の文学―伝統と可能性―」

ブライアン・バークガフニ（長崎市国際課嘱託）

長崎の外国人居留地が世界的の文学を生んだ理由

※「お菊さん」と「蝶々夫人」

※大泉黒石のこと

※倉場富三郎の夢 等々



北原白秋『思ひ出』挿画

第16回九州地区国立大学間合宿共同授業参考書一覧表

講義担当教官推薦参考書（事前に入手し目を通しておくことが望ましい）

教 官		著 者 名 ・ 書 名 ・ 価 格 等					
五十嵐	勉	樋口忠彦	著	『日本の景観』	春秋社	1981年	
石川	八朗	上垣内憲一	著	『雨森芳洲』	中央公論社	1989年	560円
関根	賢司	映像文化協会	著	『江戸時代の朝鮮通信士』	毎日新聞社	1979年	1,200円
大内	初夫	外間守善	著	『沖繩の歴史と文化』	中公新書	1986年	600円
首藤	基澄	大河内初政	著	『近世九州の俳諧史の研究』	九州大学出版会	1983年	8,800円
		河村政敏	注釈	『北原白秋集』 (日本近代文学大系第28巻)	角川書店	1970年	1,300円
岡林	稔	松永伍一	著	『北原白秋—その青春と風土—』	日本放送出版協会	1981年	900円
松本	徑夫	巖谷大	著	『懐しき文士たち』	文春文庫	1985年	420円
		松本徑夫	著	『山探検』フィールドワーク	玉川大学出版部	1978年	950円
		松本徑夫・松本幡郎	著	『阿蘇火山』	東海大学出版会	1981年	1,200円
		松本徑夫	著	『火山の一生』	青木書店	1987年	1,700円
		松本徑夫・松原正毅	著	『遙かなる揚子江源流』	日本放送出版協会	1987年	1,800円
昆	豊	森崎和江	著	『詩的言語が萌える頃』	葦書房	1990年	1,560円
		石牟礼道子	注釈	『花をたてまつる』	葦書房	1990年	1,560円

Ⅲ. 第16回合宿共同授業を終えて

1. オーガナイザーの感想

合宿共同授業参加の記 -オーガナイザーとして-

オーガナイザー 福田 益 和 (長崎大学)

本学(長崎大学)教養部の第二委員会(教務)委員長(当時)から来年度の合宿共同授業のオーガナイザーをしてもらえないかと相談があったのは昨年(平成2年)の11月だった。ついお引き受けしてしまっただが、時が経つにつれてコトの重大さに気がつきこれは大変なことになったと後悔もしたが、一方でこれまでのツケがまわってきたものと諦観し、どうせ引き受けた以上はやれるだけやってみようとヒラキなおった心境になった。

まずはテーマ選び。前回(第15回)のメインテーマは「生活と科学」で、内容的にやや自然科学分野の色彩が濃厚であった由、それでは今回は人文的な、それも思いきって「文学」の方面からと考えて、その結果「九州・沖縄-その文学と風土-」ということになったのであった。テーマとしては異色のものであったかもしれない。

次に、講師の先生と講義題目の推薦である。実はメインテーマを設定した時点で既に一つの案が浮かんでいた。それは山口県を含む九州・沖縄地域を軸とした学会「西日本国語国文学会」の皆さんの御協力を得たいということであった。我々当番校としては、九州・沖縄地域の文学・芸能を総合的に考察しようと思っていたから、タテ軸(時間-古代・中世・近世・近現代)・ヨコ軸(地域-福岡・大分……・沖縄)の両面からそれぞれの講義題目を考え、こちらからお願いした先生もあつたし各大学の御推薦でお引き受け下さった先生もあつた。結果は、嬉しい悲鳴をあげる程多くの先生方からの御希望があり(11名)、すべてお願いすることになった。特に鹿屋体育大学からも今回初めて参加していただきうれしい限りである。講義は自ずと並行講義の形態をとることになる。前回は試行的に行われていることだし、今回は一つを除いてすべて並行講義となった。ただ、学生の立場からすれば選択制となるので、すべての講義について要旨の他に講義資料も先生方に事前に送っていただきそれを冊子にして配付した。受講できない講義の内容も具体的に把握できるよう配慮したつもりである。各講師とも周到な準備のもと熱のこもったお話しをしていただいた。講義中居眠りをきめこむ学生もいたが……。

特別講義は九州・沖縄の山々、特に九重を愛して、「坊がつる讃歌」の作詞者でもある松本程夫先生

(山口大学・理学部教授)をお願いした。先生はスライドを中心に満座の学生達を魅了して下さった。

フォーラムについてはメインテーマに沿って「九州・沖縄地域の文学—伝統と可能性—」という題で準備をすすめた。基調発題者として、森崎和江・荒木尚・ブライアンパークガフニの三先生をお願いしたところ御快諾を得て安堵した。作家の眼・研究者の眼・外国人の眼、それぞれの視座からの発言を期待したのである。司会は昆豊氏。各講師ともホットな示唆に富むお話しをしていただいたが全体討議の席上、学生とのストレートな討論がもっと欲しかったとの意見も出た。

登山指導の講師については難航したが、九州大学の斎藤篤司先生がお引き受け下さりホッとした。三日目(7月14日)の夜、登山について懇切な指導があり班別けもして翌日の九重登山に万全を期したが、15日はあいにくの雨、希望者のみ牧の戸峠まで登ったがそれでは物足りず残念の思いをかみしめていたようである。その日は、みんなですぐ近くの地熱発電所を見学したり、残留組は松本徳夫講師御持参のスライド「楊子江源流」・「南極越冬」を見せていただいたりして時を過した。

夜の懇親会、例年通りの盛り上りを見せたが、琉大の八重山舞踊はさすがに見事なものであった。思った程学生達も羽目はずすことなく、最終日(16日)の全体討議に全員(?)出席していたようである。

今顧みるに、合宿共同授業のオーガナイザーを務めることなど自分にとって初めての経験で行き届かない所も多々あったと思う。テーマの設定・並行講義の進め方・講義についての討議のあり方・フォーラム等々……。更に、初日(7月12日)、当番校(長崎大学。佐賀大も同乗)のバスが途中、道路全面通行禁止のハプニングにあい、到着が大幅に遅れてしまって皆さんに多大の御迷惑をおかけした。これ等を教訓として来年度はより充実したものになることを期待してやまない。

最後になったが、各大学の引率の教官、そして事務官の方々にいろいろと御世話になった。記して謝りたいと思う。なお、九重共同研修所の管理人の方々にもこまかい事まで御面倒いただいた。あわせて御礼申し上げます。

2. フォーラム

第16回九州地区国立大学間合宿共同授業に参加して

森 崎 和 江 (作家)

まず学生の印象から記しますと、昨今の学生は過保護だな、というのが第一印象です。あたかも受験勉強のために、ママが雑事のすべてをやり、坊やたちはお勉強専一に、という生活態度が持続中と見受けました。せめて夏期の特別授業は、授業という受け身から、学ぶという能動性へ転じてほしいものですが。

私が参加致しましたフォーラム「九州・沖縄地域の文学－伝統と可能性－」の中で、私は女性の立場から、今なお女性が担当していますシャドーワーク的な生活内の雑事をもひっくるめて、それが文学のゆたかな土壌として再発見し得ることを、若者に感受してほしいと思いました。それは、たとえば、この夏期授業が、学生みずからの作業もないのに、かくもスムーズにとのえられていることの意味付けや、そのことへの思想的内省とでも（おおげさですね）いったことが、文学の土壌なのだ、ということにも通じます。つまり、どこかの誰かによって整地された土の上に字を書くこと、が文学ではないのだ、ということ。そうした発想の再発見と再確認には、九州はなかなかいい土壌です。意足らず、時間不足で、学生たちの心にまでとどきかねましたことを、申しわけなく思っています。とにかく、今日までの女性のくらしには、文学へ昇華せんとして果たしかねている原石がごろごろしています。男女共学の学生たちが、せつかくの素材を、みずから対象化すべく、自分の手足で動き出したとき、九州・沖縄の文学風土も未来への風をはらむことでしょう。

帰宅後に電話で来意を告げてくれた若者へ、たまたま他用で会えませんでした。すまない思いでいます。どうか、幼くとも、手作りの学問のたのしさを学生時代に身につけてくれるように願っています。参加させていただき、私も、ショボショボした体力ながら、たのしみがふえました。感謝いたします。ありがとうございました。

‘91年夏。

合宿授業を終えて

荒 木 尚（熊本大学）

第16回九州地区国立大学間合宿共同授業は、「九州・沖縄—その文学と風土—」という総合テーマをうたって、九州地区の国立大学の教官たちがその専門とする領域を活かしながら講義を行った。十数名の教官が、文学を九州という風土から捉えて講じるというような企画は、名実ともに画期的な試みではなかったかと思う。計画実行された当番大学の方々の御尽力に謝意を表したい。

私が参加したフォーラムでは、「九州・沖縄地域の文学—伝統と可能性—」というテーマで森崎和江氏・ブライアン・パークガフニ氏とともに基調発題をした。文化は自給自足のない土地には育ち残らない。それでは今までのような文化が育ってきたのか。この問題をめぐって、九州各藩の藩校や文庫等の内実にあふれ、また一人の具体的な文事として、天草福連木材の庄屋であった尾上公雄が本居大平から和歌の指導を受けた実際などをとりあげて、人材の育成と地域文化の活性化を考えてみた。

合宿は学生達に大変人気があるらしい。いつものコンパとは一味も二味もちがう雰囲気の中で、夜を徹して歓談し、ゲームに興じるからだという。たしかに同じ屋根の下に寝起きして、同じ釜の飯を食う過程の中で、少なくとも研究室におけるそれとは違う顔を互いに見出すであろうし、そのことが新しい人間関係につながることを期待できる。まして今回の共同授業では、いろいろの大学の学生が合宿しながら、各大学の教官の特別講義を共同で受講できるのであるから、その意義はまた格別なものであろう。それだけに学生諸君の期待も大きかったにちがいない、その成果もまた十分にあったと思う。ただ合宿研修生活について一言希望をつけ加えるならば、用意された食事をとり、教官の話聞くという受身の姿勢だけに終るのではなくて、折角日常性から脱出したのであるから、学生自身による発題や研究発表などを通しての印象的な共通体験を持ってもよいのではなかろうか。大学生となり、自分を自分が自分で育てて行く自覚が成長してくる時期だけに、そんな思いがした。

合宿授業を終えて

ブライアン・バークガフニ（長崎市国際課嘱託）

豊後中村駅で汽車を降り、改札口を出てはじめて、森崎和江先生、昆豊先生のお二方と同じ列車に乗り合わせていたことが分かった。自己紹介を兼ねることができた駅から九重共同研修所までの道中、車は山肌を縫うように続くヘアピンカーブをゆるゆると登り、人住まぬ九重高原のただ中で、私はさながら山奥の寺への巡礼の旅をしている思いであった。

冷風に山の香ただよう研修所は、周囲の山々を背景に、校舎を思わせる建物であった。その建物に入って、玄関に数十足もの靴が整然と並べられている光景に気分さわやかとなる。が、はたして学生自らそうしたのだろうか、と私はつい心の中で首をかしげた。

私もパネリストの一人に加えていただいたフォーラム「九州・沖縄地域の文学―伝統と可能性―」は、午後一時から五時まで、昼食をとったホールで行われた。四時間も続くと聞き、最初は、体力と知力の限りを尽くすサバイバルの世界を想像していたが、時間はまたたく間に過ぎ去った。基調発題と続いて行われた話合では、ありとあらゆるテーマが取り上げられ、多岐にわたる討論が行われたという点でも、今回のフォーラムは意義深いものであったと言えよう。更に、概して学生たちが謹聴し、的を射た鋭い質問をしていたのにも、感動させられた。

さて、今回のフォーラムで、学生たちは質問、コメントなどを用紙に記入して提出するよう求められた。氏名や大学名は記入されていたが、パネリストは、当の質問者が誰だか分からず、もどかしい思いであった。時間的制約もあったのだろうが、個々の学生と直接言葉を交わすことができなかったのは、心残りである。

私は夕食後ただちに長崎へ戻らねばならなかったもので、残念ながら夜の集いには参加できなかったが、さぞかし活発な意見の交換が行われたに違いない。

私が「下界」に降りるとき、地平線をしとねにゆうゆうと胡床《あぐら》をかいているように見えた夕陽も、汽車が豊後中村駅を出るころはその姿を消し、もう辺りはたそがれに包まれていた。

フォーラム

昆 豊（福岡教育大学）

講師（森崎和江、荒木尚、ブライアン・バークガフニ）紹介をした直後に、次のような提言を行った。副題にある「伝統」とは何か？。明治になって英・仏語の tradition の訳語として造られた語句だが、custom とは異なる点を認識すべきだ。伝統とは①民族（言語を含む）と②環境（時代と地理的自然を含む）と③天才との三つの要素の影響が歴史的になったものを言う。日本の古代にあつては中国文学（漢詩）と仏教文学との影響が大きい。例えば漢代に作られた七夕伝説に基く古詩の影響は記紀の神話伝説にも萬葉集の百三十首余の歌などにも及んでいる。山上憶良の七夕歌十二首などはその一例である。

ところで人類最初の文学は歌謡であり、韻文であつた。詩には epic（叙事詩）と lyric（抒情詩）があり、文学発生には初めに「旋律ありき」と言ってもよい。歌謡とは感動を表現するための手段であり、部族（集団）の精神を表出した言語芸術なのであつた。感動詞や形容詞や形容動詞などは、かつては思わず口に撃いて出た内部衝撃の言葉だつたようである。部族・民族の違いはあれ、今日でも未開の原住民の歌を聞くと、初めに音楽と踊りとリズムありきを実感される。歌は原始民族固有の言葉のリズム感覚から生まれ、音楽（打楽器、弦楽器、吹奏楽器）の伴奏のリズムに乗った踊りに巧みに調和結合された言語表現となっている。主にヘブライ語で書かれた『旧約聖書』やエジプト語で書かれた『死者の書』については詳述する暇がないが、人間の悲しみは世界の共通言語であつた。

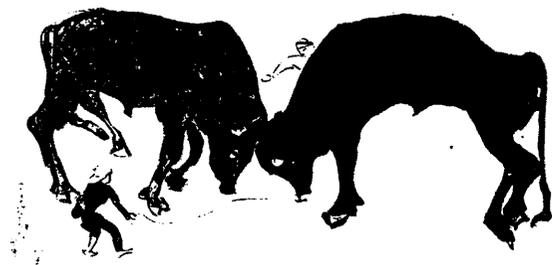
西洋文学の祖ともなつた叙事詩『イーリアス』と『オデュッセイア』の史詩と貴種流離譚とに匹敵する日本の記紀の説話と歌謡とを検証するならば、素盞鳴尊と倭建命との貴種流離譚が挙げられる。日本英雄伝中の英雄として最も人間的な英雄なのだが、九州文学の主人公としても注目したい。高天ヶ原を追われた素盞鳴尊は神々の国に反逆した自由人として魍魎魍魎を退治し、救出した娘を娶つて「妻籠」の歌を歌う。「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠めに 八重垣作る その八重垣を」の名高い歌こそ、和歌の起源の一つと目されている。倭建命の説話と歌謡では、建く荒き心を父景行天皇から恐れられ、九州の熊曾建兄弟討伐を命ぜられるのが貴種流離譚の始まりなのである。西の熊曾建と出雲建を討殺して帰京した彼には新たに東国討伐の命が下る。東国遠征の帰途に詠んだのが「新治筑波を過ぎて 幾夜か宿つる」で、翁の返歌「かがなべて夜には九夜日には十日を」の間答歌（片歌）が筑波の道、連歌の祖となる。やがて、萬葉集において和歌という新しい伝統が形成される。有名な酒讚歌も大伴旅人と山上憶良とによって太宰府で歌われた。唐詩の影響。

古代と同様に西洋文学の大きな影響を受けて出発したのが日本近代文学であつた。西欧文明との大

きな格差を埋めるために猛烈な努力をしたが、新しいものばかりを摂取できない日本の事情（①天皇制、②徴兵制、③封建的官僚制、④文芸検閲制等）もあった。いわゆる近代化との歪みがそこから生じた。鷗外・漱石・荷風・潤一郎らの文学を考える場合でも、この制約を抜きには語れない。

九州の近代文学は多彩な宝庫なのだが、北海道文学全集や沖縄文学全集が刊行されている現実にも比べても、現状は立ち遅れの感がある。九州文学全集が刊行されるならば、日本文学に異彩を放つことは断言できる。沖縄の場合、明治以前を琉球文学、以後を沖縄文学と称するが、琉歌や山之口獏詩集や大城立裕の「カクテル・パーティー」等は後述したい。

日本の近代詩の頁を開いたのは『新体詩抄』（明15）なのだが、その編者の一人は太宰府出身の巽軒井上哲次郎である。だが、それを可能にしたのは江戸末期に長崎に遊学した蘭方医や蘭学者であった。青木昆陽、前野良沢、大槻玄沢、太田南畝らがオランダ商館を通じて入手した西洋詩を漢詩韻法に移して翻訳していた試みを忘れてはならない。詩の分野では長崎・天草のキリシタンに関心を与せて異国情調に酔わせた北原白秋の『邪宗門』がある。『思ひ出』以降の詩作によって国民的詩人の名を高からしめた原点は、郷里柳河にあった。一方、東京生れだが、熊本県の名家に縁があつて多感な時期（小学四年から五高卒）を熊本市で過した木下順二には戯曲『風浪』『彦市ばなし』『夕鶴』『おんによる盛衰記』などがあり、殊に最も願いとすることをした結果が逆となる矛盾を鋭く問うた『夕鶴』は普遍的方言の工夫による純粋な日本語への探究が試みられ、ぶどうの会の山本安英や劇団民芸の宇野重吉・滝沢修らの努力と演出岡倉士郎によって長期上演された。民話劇と伝統演劇（歌舞伎等）とへの重要な問題提起だけではなく、更に英・独・仏・露など10ヶ国語に翻訳され、団伊玖磨の作曲でオペラ化もされ、広く海外にも紹介されて、大きな反響を他国に及ぼした。かつて徳富蘆花（熊本県出）の『不如帰』が数ヶ国語に翻訳されたように……。



丸木位里『斗牛』

3. 参加教官の感想

花 田 俊 典 (九州大学)

九州地区国立大学間合宿共同「交歓会」に参加したのかもしれない。まるで修学旅行を引率する教師のように。それはそれで結構なのだと思う。けれども徒労感が残る。わたしはやはり合宿共同「授業」に参加したいという学生たちの瞳目すべき精神と出会いたいと願っていたからだ。

思いがけず会えることができたのは、各大学の教官や事務官やフォーラムの講師の方々の瞳目すべき善意と献身と寛容の精神であった。それはじつに神々の聖地であるかと見えた。

神は、しかし一方に悪魔を必要とするのかもしれない。壁に穴のあいた狭い一室の縁側にまで布団を敷いてザコ寝をしながら、わたしは深夜に至るまで悪魔の嬌声や、禁じられていたはずのイッキ飲みの歓声を聞いた。あれは、たしかに悪魔の跳梁にほかならない。

悪魔は、明るい時間は眠くなるのだろうか。無言の善意や献身が無意味で退屈なのだろうか。

わたしは個別の討議と全体討議の時間に「馬鹿」の話をした。下界では「馬鹿」とよばれる神々の話をした。

どうやら悪魔にも「馬鹿」好きがけっこういるらしい。善意や寛容に対して狡猾につけこむ「利口」よりも、次の時代の扉の鍵をあけるかもしれない「馬鹿」のほうが、やはり魅力的であるのらしいのだ。

悪魔が神に変身する。世話役を懸命に演じる長崎の「馬鹿」。八重山舞踊の練習に余念のない沖縄の「馬鹿」。わたしの部屋まで質問にきて瞳をまんまるくして笑ったあどけない「馬鹿」。若い世代の「馬鹿」たちも、なかなか年季の入った年配の「馬鹿」に負けてはいないのであります。

神々と悪魔の饗宴。下界に帰りたいと初日から願いつづけていた無印のわたしには、それはなかなか刺激的な、しかし苦悶の日々ではありました。いかにも〈種〉は蒔かれた。わたしのなかにも、やはり蒔かれた。けれども、来年も志願して参加しろと勧められたら、鄭重にご辞退申し上げることにする。しばらくは〈種〉を育てるのに精一杯だからというのがその理由です。念のため。

合宿共同授業に参加して

斉 藤 篤 司 (九州大学)

朝、窓際に寝ていた私は朝日のまぶしさに目をさました。よかった、今日は晴れだ、とほっとした瞬間目が覚めた。これは、登山前夜に見た夢である。これほどまでに天候を気にしていたわけだが、

前日までの好天とは裏腹に登山当日の朝は無情にもかなり強い雨が降っていた。

雨が小降りになり次第、登れるところまで行くということに計画を変更し、学生を待機させ1時間、2時間と天候の回復を待ったが逆に悪くなる一方で、午前中は登山を断念し、八丁原地熱発電所の見学となった。

しかし、午後になっても天候が回復する気配はなく、せっかくのお弁当も食堂でとるはめになった。そして、しばらくは久住はもちろんのこと、いろいろなところで歌った記憶がある、あの「坊ガツル賛歌」の作詞者の松本先生にスライドの上映をしていただき、何とか場を凌いでいましたが登山を楽しみにしていた学生も多く、雨のために外に出られないストレスも加わり、とにかく希望者だけでも行けるところまで行ってはどうだろうかという意見がではじめた。今度初めて知ったのだが、沖縄には山らしい山もないことから、特に琉球大学の学生は登山を楽しみにしていたようである。

そこで、とりあえずこの雨の中でも登山に行きたいという希望者を募ったところ、40名近い学生が希望したため、急遽班を再編成し、教職員の方にも無理をいって同行していただくことになった。

午後2:00研修センターを出発し、3:50枚の戸峠到着、満足な雨具も無い学生は必ず濡れである。枚の戸から上は霧のため何も見えず、時間も時間であるためそこから先へ進むことは断念せざるを得なかった。16:10枚の戸峠出発、17:10研修センターに到着。全員必ず濡れではあったが何ともいい顔になっていたのが印象的であった。

今回、登山指導担当として、初めてこの合宿共同授業に参加しましたが、他大学の教官・事務官の方や学生と交流ができ、良い経験をさせていただきました。私の担当した登山も、そういった親交を深める上で格好の場となるはずでしたが、雨のため中止せざるを得ず残念でした。

最後に、あの雨の中でも行きたいと言ってくれた学生とお付き合いいただいた教官・事務官の方々には心から感謝いたします。

共同授業に参加して

板 坂 耀 子 (福岡教育大学)

資料の送付が遅れたり、都合で早めに帰らねばならなかったりで、十分な協力ができないどころか御迷惑をおかけしたことを申し訳なく思っている。今回が初めての参加であったが、学生たちをはじめとした参加者の熱気に圧倒された。特に当番の長崎大学を中心とした主催者の方々の活躍と御苦労は、見ていて目を見はるばかりであった。学生たちにとっても、このような形での他大学との交流は非常に貴重な体験であろう。

ただ、曲がりなりにも講義と名のつくものをする立場としては、前夜もその前夜も熱気あふれる計

論や交流の結果、数時間の睡眠しかとっていない学生たちに対して話をするのは苦痛である。

もちろん学生たちは、徹夜続きにもかかわらず真剣に聞いてくれて、その真面目さにはむしろこちらが驚いた。しかし一方でやはり寝ている者や休んでしまう者もいるし、そのことにとても文句は言えない気がする。

そして、こういう図々しいことを書く教官は他には多分いないと思うから、あえて私が書くけれども、人前で講義をするということは、やはり私にとっては神聖で、どう表現したら誤解されずに自分の考えを相手に伝えられるか、授業がはじまるぎりぎりまで毎回、緊張するし神経をすりへらす。自分の大学の日常の授業でもそうである。それは、どんな教官でもそうだろうと思う。

だから、聞く方もベストの状態であってほしい。やっと起きていられる状態で聞いていてわかるような単純なことや強烈なことを少なくとも私はしゃべっていない。今回のフォーラムでの森崎和江氏の話にしても、全力をふりしぼってうけとめ、考えなければならぬ微妙さと重さを持っていた。寝不足の頭で太刀うちできるようなしろものではなかった。

とは言うものの、あのような行事をする以上、徹夜に近い討論や交流は、学生にとって何より楽しいだろうし、また意義深いものだと思う。それに、あの山の上まで行って、ふだんと同じ授業を同じように聞くのもつまらないだろう。

それはわかるが、ただ、学生や教官の交流が中心である合宿に、授業という形式を整えるだけのために講義の時間を設けるのでは、やはり講師に（今回自分が講師なので言いにくい）失礼と思う。このような日程の中に、日常と同じ形式の講義をはじめこむのではなく、この状況を生かして、もっと型破りな授業形態を工夫するなど、今後の課題として検討することが必要と感じた。単位取得ということも事情としてあるかもしれないが。

合宿共同授業に参加して

太 田 昇 一（九州芸術工科大学）

合宿共同授業には、大学における委員の関係から引率教官として、参加させていただきました。今回の総合テーマが「九州・沖縄—その文学と風土—」とテーマがかなり狭く、テーマがそうなのだから当たり前なのですが、各講演者の題目も文学・文学と並び、果して研修所の4泊5日に門外漢の私自身、および芸工大の学生が耐えられるのか（もっとも学生の方はテーマを知って参加していますが）を当初心配しました。

そんなわけで各先生がたの講演はさておき、私のもっぱら毎晩の『自由時間、自由討議の時間』を

大いに楽しみました。学生の方も他大学の学生との交流できる楽しみで参加していたようです。わざわざ人里離れた所で合宿するのですから。

毎晩の飲酒談話会(?)での芸工大や他大学(特に、宮崎大、熊本大)の学生との話し合いでは、今の学生気質が少し判ったような気になり、又これまで学生とじっくり話し合う機会が持てなかったのが良かったと思います。特に、芸工大の学生各人が高い理想をもって入学し、何故に芸工大を選択したのかを熱っぽく語るのを聞いて、若かった頃の自分を顧みて感心したり驚いたりしました。また、焼酎のお湯割用のために湯を沸かしに行つてガス警報装置の作動にオロオロしていた女の子達、放送局へのアルバイト、ケーキ屋へのアルバイトの話等、この様に知る人ぞ知る思出を各人に沢山出来たのでは無いかと思います。

今回の合宿共同授業に参加して、特に同室になった他大学の教職員の方々とは交流を深め合うことが出来、学生でなく我々教職員にとってもよい経験になりました。

最後に、当番校の教職員、学生の方々のご苦勞に心からお礼を申し上げます。

合同合宿授業に参加して

石川 八 朗 (九州工業大学)

合同合宿授業には今回はじめて参加しました。

いろいろな大学の学生が、寝食を共にして学び語るという経験は、いうまでもなくたいへん有意義で、全体としてそのことをまず実感したことが、第一の、大きな印象であったということが出来ます。

今回は、テーマが風土と文学というもので、前年度の環境問題などに比して、全般的な学生の興味をひくかどうか、内心危ぶんだりしましたが、参加者数も例年に比して少ないということもなく、よかったと思っています。ただ昨年度の報告書にも、参加学生のすべてが授業に対して積極的でないということがいわれ、学生の感想にも飲酒や夜ふかしのことが問題にされていますが、私のせまい見聞でも、若干その傾向を認めざるを得ないようです。夜遅くまで語り合うことは、得難い機会ですから悪いとばかりはいえませんが、授業中心の合宿であることをきちんと認識し、テーマについてもよく理解して参加してもらいたいと思いました。学生の参加意識をこの方向で高める努力は、各大学でも行われていると思いますが、なお一層の徹底をはかるべきだと思います。

授業をした立場で反省すべき点はいろいろあります。自分の準備不足ということが大きいのですが、そのことを棚上げして申しますと、もう少し時間が欲しいという感じを否めませんでした。時間設定上難しい問題があるかもしれませんが、少し時間の枠をひろげることも検討していただけないでしょ

うか。学生を二分して40名前後で授業をする形は続けていただきたいと思いますが、テーマと総体的にかかわるような、今回では例えば、「文学の風土と風景論」のようなものは、全部に聴かせることにしては、と思います。

フォーラムの講師の方々とのお話は、それぞれに印象深いものでした。学生たちにとって、これからのことを考える上で何らかの糧になって行くことと思います。

懇親会の出し物は、それぞれ面白く見せてもらいましたが、やはり地域や大学の特色を出したものがよいと感じました。

最後に、企画から実施まで、りっぱな運営を果された当番校長崎大学、主管校九州大学の担当教官及び事務官に、深厚の謝意を表したいと思います。有難うございました。

合宿共同授業に参加して

五十嵐 勉（佐賀大学）

「地理屋の僕が、文学について講義をしたなどと言うことが、地理学会にバレでもしたら、笑われるだろうなー、まあ、しかし一般教育の一つだし、どうせ久住の山奥の隔離された空間で話す内容だから、許されるだろう・・・」などと、安易に考えて、「文学の風景論」なるおしゃべりをさせて頂きました。今、話題の「教官自身の自己評価」からすれば、最も糾弾されるべき講義であったかもしれません。

文学部国文学科の学生に、いや大学院生に、いやいや学会発表にも匹敵する程の格調高い講義をされた先生方とは好対照であったかと思っています。僕のように文学作品を斜めに読んで、要領よく(?)講義すると言う、このパフォーマンスに感動こそなくとも興味を覚えて頂いた学生さんが何人かでもいれば、僕は責務を果たしたかと思っています。か細く力説した「風景こそ身体の一部である」ということを、恐ろしく退屈な5日間を窓からの風景を眺めるだけに費やしたおかげで、僕自身が身をもって確認したのであります。ただ、残念ながらそのような身体としての風景を文学で叙述するには、恐ろしく才能にかけている自分を再発見したのも事実であります。

学生諸君の昼夜にわたる奮闘ぶりには、慎んで敬意を表します。学会発表の会場で、そして教授会の席上でも平気で居眠りをする僕には、「こら!、講義中に眠るな!」などと、監督・指導するほどの資格も自覚もありません。昼なお暗い湿ったオンボロ小屋に、現代のトレンドィー青年を閉じ込めておいたものとしては、酔っぱらって「常軌」を逸した行動をする「バカ」がいてくれたことの方が、むしろ安心すべき状況かと思っています。敢えて、苦言を呈せば、「イッキ! イッキ!」でしか盛り上が

ないのは、しごく残念であります。そろそろ某教官のように楽しく酒を飲める域に達せるよう、一層の精進を望みます。

文学と風土という比較的地味なテーマでしたが、九州地区の学生にとっては親しみやすく興味を覚えるものであったかと思います。並行講義もフォーラムも概ね成功とあって良いでしょうが、講義内容の面では、やはり一般教育としての講義であることは十分に考慮すべきことでしょう。僕も、明日から「地理学・・・」の本ばかりではなくて、「文学」も読んでみようっと！

最後になりましたが、当番校の長崎大学の先生方、事務の皆さん、そして何よりも学生諸君にはお世話になりました。

雑 感

首 藤 基 澄 (熊本大学)

初め「五足の靴」について講義をしてほしいという話があったが、私の方で少しアレンジして、「北原白秋とその風土―「五足の靴」を中心に―」とした。白秋の原風景柳河と、新詩社五人衆の九州旅行をからめて、『邪宗門』の詩人白秋の風土の特質を明らかにしようと思ったのである。実際の講義では、水郷柳河と天草のキリシタン文化とに言及したところで時間切れとなり、白秋がそれをいかに主体化し、詩として形象していったかを語るどころまでいかに終わってしまった。柳河を廃市と捉え、キリシタンを邪宗と捉えながら、それを自己の魂の避難所とし、詩人の戦いの拠点としているということ、私としては明らかにしたかったのだが。

私に割り当てられた時間は、3日目の2時限目、学生にはもう相当に疲労の色が出ていた。単位を出すためには超過密にならざるをえないのであろうが、単位のために折角の講義を消化出来ないという皮肉な結果を招いているのではないかと思った。朝から晩までのつめこみは、もうここらあたりで反省し、講義とゼミを併用して余裕をもって学ぶということを考える時機が来ているのではないか。

疲れをおして、拙い講義を聞き、質問をし、手紙まで書いてくれた学生たち（もちろん講義に顔を出さない者もいたが）と、またじっくり白秋について語り合ってみたい、と夏の終りになってしきりに思う。

実に心の行き届いたお世話をして下さった長崎大学の担当者に深く感謝しつつ。

第16回九州地区国立大学間合宿共同授業の感想

松 瀬 憲 司 (熊本大学)

茹るような下界からすれば、別天地の九重で私が最も印象に残ったことは、夏の太陽にも似た学生諸君のエネルギーである。もちろん、それは授業に対する姿勢のみならず、連日行われた交歓会で見られたエネルギーも含めてである。汲めども尽きぬとはまさにこのことだろうと思った。

今回でこの合宿共同授業は第16回目を迎えると聞く。とすれば、私が学部在学時にこの企画は既にあったことになる。今更ながら、参加しなかったことが悔やまれる。引率教官として参加するのと当の学生として参加するのでは大違いだから。他の大学の学生たちと楽しそうに話をする彼らの顔の何と生き生きとしていたことか。自分の大学という狭い枠を越えて交流することは実に意義深い。他者との触れ合いの中で自己を浮彫りにできるからである。脳ミソはアルコール漬けになりながらも彼らが体験した人と人とのコミュニケーションは授業の価値とはまた違った大事な側面を十分に持っていたことだろう。この合宿を契機に一生つき合っていく友人を得た者もいるかもしれない。

そのような意味において、この合宿共同授業は参加した者に必ず、(少しでも何かを得ようという気構えのある者に対しては)、その成果を与え得る。だから、一人でも多くの学生がこの企画に参加して、様々な発見をしてほしいと思うし、もう学生として参加できなくなった者となれば、これから参加する権利を持っている学生諸君たちのことを羨しく思う。来年も素晴らしい合宿になることを祈ってます。

文学と合宿のはざまにて

妹 尾 好 信 (大分大学)

合宿というものにはほとんど縁がない。学生時代にはサークル活動をしなかったし、勤めるようになってからも、ゼミの合宿などは考えたこともない。人と一緒にワイワイやるのは疲れるから好きでない。こう言うとひどく暗い男のようだが、案外そうでもない。人間嫌いで孤独愛好癖があるというよりは、単にものぐさなだけなのだ。人と付き合うのは面倒臭い。一人でいるほうが気が楽だ。文学などをやろうという人間にはこの手合いが少なくないようである。

そんな小生が合宿共同授業に講師兼引率者として参加することになった。むろん望んだわけではない。統一テーマが「九州の文学と風土」ということなので、所属する教育学部の国語科教室に参加依頼が来た。あとは、いちばん若い小生が無言の圧力を感じて自動的に引き受けることになったわけで

ある。さて困った。小生、生まれは四国で、学生時代を過ごしたのは中国地方である。九州に来てからはまだ4年と少しである。九州の風土についてはまるで無知だし、九州地方の文学について勉強したこともない。国語科の先生方の中には九州生まれの方や長く九州の地に住んでおられる方もいるのになどこぼしても始まらぬ。専門は王朝文学だから、京都を舞台にしたものばかりである。仕方がないので、九州地方の地名を詠み込んだ王朝和歌を取り上げることにした。とは言え、歌枕というのは、その土地の風土には全く関係なく、ただ名前の字面のみが王朝人に関心を持たれたに過ぎず、実際にその地を訪れて詠まれた歌などほとんどないのである。あまりテーマに添わぬ講義になることは避けられない。

それよりも気が重いのは、4泊5日という小生にとっては想像もつかぬ長期の合宿生活に堪えられるか否かということである。学生たちとの1泊旅行でも、夜は一人部屋で寝かせてくれと駄々をこねたりする小生であるから、頭を抱え込んだ。

講義題目を記したプログラムが届くと、その内容の充実ぶりは、文学専攻生なら垂涎のものであった。小生以外の講師陣は錚々たる顔ぶれであるし、講義の要旨を見ても小生のものを除いて極めて興味深いものばかりである。フォーラムには著名な作家の先生まで見えるという。これはすごい。九州中の文学青年たちが競って参加するに違いないと思った。小生としても、文学を好む若者たちと語り合う機会を得られるのは楽しみであった。

ところが、いざ合宿授業が始まってみると、予想した雰囲気とはかなり違っているなどという印象を禁じえなかった。学生たちが深夜に展開するすさまじいパフォーマンスには完全に圧倒されたが、それは文学的香気にはほど遠いものであった。十年來の知己のごとく打ち解けて飲んで騒いでいるが、小生が学生時代に経験した酒の飲み方とは随分違う。時代の流れによる変化もあろうが、やはり文学系の学生とは質の異なる集団に見えた。

参加学生の大半はテーマに惹かれてではなく、合宿そのものが好きでやって来たのだ。彼らはどんなテーマであっても参加したに違いないと思えた。参加者名簿を見ても、文学関係を専攻する学生は極めて少ない。

考えてみれば、文学などを好む学生は、テーマには関心を抱いても合宿という共同生活にはなじまない連中が多いのではないか。小生が学生であっても参加するほどの元気はなかったろう。これは講師にとっても学生にとっても残念なことだと思う。興味深いテーマを設定して下さり、合宿共同授業の運営に終始大変な御尽力をいただいた当番校長崎大学教養部文学教室の方々には深く感謝するものであるが、そもそも文学と合宿というのが、どうも本質的にそぐわない部分を含んでいるような気がするのである。

もちろん、参加学生すべてが同一色であったわけではなかろう。小生の目につかぬ目立たないといこ

ろで静かに文学論や人生論を戦わせていた学生もいたかも知れない。だが、それはごく小数であった。

願わくば、何かまた別の形で、文学好きな学生のためにこのようなレベルの高い講義をまとめて聞ける機会を作って頂ければと思う。

小生にとっては、かなり忍耐を必要とする5日間であったが、とは言うものの、日頃接することのない元気な若者の強烈なパワーを目のあたりにすることができ、実に有意義であった。懇親会の楽しさは特筆に値する。また、講師として参加された先輩研究者の先生方とお近づきになれたことは大きな収穫であった。最後に、お世話頂いた関係各位に改めて厚く御礼申し上げる次第である。

合宿共同授業に参加して

岡 林 稔 (宮崎大学)

考えてみればこの合宿生活はほとんどのものが1度限りの出会いで別離し、2度と顔をあわすこともないものではなかったでしょうか。そのように考えると5日間の共同生活が、行きずりの無責任なものになっても少しも不思議はありません。学生諸君は不祥事を起こさず、先生方も無事に講義の任務を果たせばそれで5日間の共同生活は終わってしまう。マクベスの台詞ではありませんが、「自分の役の時間だけ舞台をぎくしゃく歩き回ったかと思うと、間もなくどこかに消えてしまう」哀れな役者を思わせます。それだけに幕が下りる最後まで気の抜けなかった舞台監督の長崎大学の皆様の御苦勞は「役者」のそれとは比較にならぬほどのものがあったことと思われます。

しかし初日の夜「一気飲み」の危害から逃れて私達の部屋で一晩中苦しみ続けたI君に僕は介護の手を貸しながらも激しい罵倒の声を浴びせることもありました。3日目は「地方文学の発生」を講義し、講義についての討議では国家による「文化統制」に関して「君が代」「日の丸」が話題に上り、沖縄の本土復帰や学校での国歌・国旗の問題で本音をはかざるを得なかった場面もありました。時間が許す限り先生方の講義を受けて、僕は国文専攻の先生方の話の中から、僕自身の地方文学論を検証し続けたものでした。テーマが重なったH先生には不躰にも個人的に資料を郵送して下さいようお願いもしました。たとえ雨が降ろうがそこに九重の頂があれば体を痛めて足を運びたいと思い、牧の戸峠までではあったが学生諸君と急な坂道を歩き登りました。懇親会では登山のあとの喉の渴きに浴びるほどビールを飲み、各大学の出し物にはおもしろいものには喝采を送り、跳ね上がり学生諸君にはヤジや怒号を發し、我が大学の出し物には子供の運動会の時のようにシャッターを切っていたのでした。

涼しかった九重から下界に下りてさらに宮崎まで南下すると、連日36度の猛暑の中すべての出来事

がすがすがしい思い出として蘇って来ます。学生諸君にとって九重での青春のひと時がどうであったか。日ごろのキャンパスでの生活がこのように異部族的でありながらも家族的であり、バツカス的であり、学問的であり、そしてなにより限られた時の中で集密的であることがあったでしょうか。もはや、「白痴の語る、響きと怒り」に満ちた舞台ではない、その青春のひとコマがそれぞれの大学生活での導きとなることを信じてやみません。一時の出会いであったがゆえに何物にも代えがたい思い出となったのかもしれませんが。再び新たな舞台監督のもとに来夏の合宿の舞台が整えられ、いつまでもこの合宿共同授業が続くことを祈ります。

第16回九州地区国立大学間合宿共同授業に参加して

大内初夫（鹿児島大学）

この合宿授業への参加を呼びかけられた数ヶ月前は、夏休みに入って7月12日からとのことで、私は光と緑にあふれた九重高原を想像していた。しかし梅雨明けのおそかった今年は、当日はあいにくの雨で、悪天候であった。折角の九重での合宿授業であるから、今後は天候にあわせて一週間おくらすとか、梅雨明けのほぼ確実な7月20日頃からにすとか、山のよさを参加者に十分堪能させるための何らかの処置が出来ないものだろうか。

次に、私は7月13日(土)の午後1時すぎからの「近世九州の俳壇」の授業を1コマのみ担当し、すぐ下山したので授業の感想のみ述べる。授業参加者100名であったが、適当な会場がないとのことで食堂が教室として使われた。そもそも食堂は食事をするところであるから、授業をする教室とは部屋の機能が別である。教壇もなく、テーブルを教卓代わりにし、学生はさまざまな方向を向いて座っているのであって、この点、授業が非常にやりにくかった。私は大学の教室における授業を予想し、ノートや資料を持参していたが、それらを見ながらゆっくり話していく余裕がなかった。それは教授者と受講者が同じ平面にいる当然の結果であったろう。

授業中、私語する者もいたが、今年は理系の学生が多いと聞いた。とすると今年の合宿授業のようなテーマは文系の学生にふさわしく、理系の学生には不適當ではなかったろうか。

終わりに、90分の授業時間に対し私の授業は内容が広く多方面にわたりすぎていた。予備知識のない学生に分かるように話すには噛んで含めるようなことが必要であったろう。

その点、長崎大学の方でわざわざ作製してくれた参考資料も十分授業中に活用出来なかった憾みがある。要するに私が一度もこれまでこの合宿授業に参加した経験がなかったからで、もしそうした経験があったなら事前に授業のあり方も呑み込めていたろうと、大いに反省をさせられた。

合宿共同授業の“不思議”

大 嶋 眞 紀 (鹿児島大学)

私は今回はじめて、引率教官として合宿共同授業に参加する機会を得ました。日頃、留学生対象の日本語・日本事情を担当しているため、日本人学生と接する機会の少ない私にとっては、まさに“不思議”発見の連なる5日間であったといえます。

その一。昼と夜の学生の態度の落差。質問をしない学生がいる、発言をしない学生がいる、全員が講義のじゃまをしないでくれる(?)、それだけでも驚くべきことなのに、夜の部の彼らの変身ぶりにはもうミステリーとしかいいようがない。大学祭などで一気飲みをしたり、カラオケバーではたちまちスターと化す彼らの人格的アイデンティティーの“不思議”を改めて痛感させられました。

その二。討論の不成立。最後の全体討議で考えさせられたことですが、質問や意見が言いつ放しで、correspondence (照応) がない。野球やゴルフの打ちっ放しと同じで、よくいわれることですが、テニス型のラリー (応酬) がない。唯一の救いはフォーラムで、B. パークガフニ氏が、「蝶々夫人」は日本人だったら葬ってしまいたい作品ではないか、とけしかけたのに対し、学生がのせられて質問用紙で反論したらしいことだ。しかしながら、その先のラリーがみられなかったのはやはり物足りない。

質問用紙で学生の声を徴集するというのはスマートだが、妙にまとまりすぎて、しかもパネラーと参加者の間に距離を作ってしまう。その場で挙手をさせたら、気まずい沈黙が続くか、まとまりのない無駄話に終わるか、予測はつかなくなるが、それが今の学生のありのままの姿であるなら、仕方のないことでしょうし、話し合いの訓練の場としてのフォーラムは逆に生きると思うのですが……。

その三。居眠りをする学生がいる、おしゃべりをする学生がいる。昨年の報告書にもこの点については先生方の御意見がたくさん寄せられていました。居眠りをするのは当人の自覚の問題、講師に失礼だ、夜の生活にけじめをつけよ、等々。しかしながら、居眠りが可能な講義というのもミステリーである。留学生を相手にしていると、居眠りをするひまも、させるひまもない。ヤジ、怒号とまではいかなくとも、発言が頭上を飛び交い、講義とは名ばかり。乱戦、合戦を通じてお互いの思考のあり方を確認していく作業が中心となる。従って講義のテーマと関係のない私語を交わすなど問題外。たまに日本人学生を相手に講義をすると出くわすが、私は直ちに御退席を願う。今回もおしゃべりグループが散見しましたが、あの無邪気さ、子供っぽさは“不思議”でなりません。

以上、主として学生の受講面での“不思議”を思いつくままに挙げさせていただきましたが、最後に全体を通して一言。

細かいスケジュール表がそもそも必要なのか。「22:30 消灯就寝」というのは無意味だという指摘

が昨年の報告書にもありましたが、素晴らしい自然の中で、朝の散策などの自由時間が乏しいのではないかと、学生の受講ももっと自由であっていいとさえ思います。単位取得という鉛玉の拘束力はそれほど絶大なのでしょうか。連日の雨で、時間的、空間的な幽閉感が漂っていたことは否定できません。

100名以上の人間が集団生活をする、事故は何としてでも避けねばならないという条件の下で、実施校・主管校の御苦労、御尽力には頭が下がるばかりですが、合宿授業のみならず、国立大学の充実、発展のためにも、来年度の実施校である我が鹿児島大学が、これまでの蓄積を生かし、発展的に継承していくことを願わずにはられません。

最後に個人的なことですが、参加直前まで体調を崩していたのが、連日の宴ですっかり復調したのも、合宿七不思議の一つです。病気でお騒がせした鹿大生も今は元気いっぱい、お世話になりました関係者の皆様に心から感謝申し上げるばかりです。ありがとうございました。

合宿共同授業に参加して

長 友 武（鹿屋体育大学）

7月12日から16日までの九州地区合宿共同授業に参加してみて、参加するまでの戸惑いとか心配は吹き飛び、実に清々しい気持ちでいっぱいです。他の大学の学生さんに立派な講義ができるだろうかと準備も一生懸命やってきたのですが、初まってみると、学生さんの反応も良く、特に琉球の琉歌や三線の話でしたので、琉大の八重山芸能クラブの皆様方に実際に三線を弾いてもらって、琉球民謡を歌ってもらって説明を加えることができ、琉大の皆様にはお礼を申し上げます。

私は鹿屋体大に赴任する前に9年程、琉大の教育学部に奉職していたのですが、関根先生ともお会いでき、また琉大の皆様方と夜を徹して琉大の最近の話題や思い出話をでき感激しております。私の寝室は4人部屋でしたが、近くから毎晩、若人達の笑い声、お酒を飲んでの歌声、花火の音などがけたたましく鳴りひびいて、少し眠れなかったのですが、若人の疲れを知らないエネルギーをそばに感じて自分も少し若がえったような気がします。他の大学の学生さん達も、私がつれていった我が大学の三人娘に対して温かくして頂き、ありがとうございました。また機会をつくって頂き、鹿屋の地に我々を訪ねて下さい。

最後になりますが、九大の部長先生を初め、長崎大学の教養部の諸先生方それに事務局の方々、なにからなにもお世話になりっぱなしで申し訳なく思っております。最近の文部省の委員会答申で教養部、教養課程の改組問題が出ており、小さな我々の大学に於いても教務委員会などで、そのことが議題になっており、特に長崎大の先生方や事務局の方々に現状を教えて頂き、参考とすることができ

ました。また、「坊がつる讃歌」の作詞者、山口大学の松本先生主宰の山川の野芹取りに福教大の笠先生などと参加させて頂き、九重の自然を満喫することができました。一人三役の働きをされた松本先生の名講義、生涯忘れることはできません。今回の合宿は大学教師として約20年やってきてマンネリ化してしまった私にカツを入れてくれました。ご参加された教官、事務官、学生さん達のご多幸をお祈りして終らせて頂きます。

合宿共同授業に参加して

関 根 賢 司 (琉球大学)

(1) 共同授業について

「九州・沖縄の文学」をテーマとしたことは有意義であったと思われませんが、フォーラムでは、司会者の強調にもかかわらず、必ずしも沖縄の文学が視野に入っているとは言えないのではないかと、そのように考えてしまうのは、たぶん沖縄から参加した者の偏見であり、共同授業の全体をとおして考えてみれば、九州各地の文学活動の豊かさが十分に窺い知られる好企画であったと思います。参加学生に文科系が少なく、むしろ理工科系が多数であったことには疑問を持ちましたが、一般教育の総合科目の啓蒙性を考えれば、専門的にならなかった点を評価すべきでしょうか。共同授業をとおして今後とも九州・沖縄のさまざまなテーマが掘り下げられ、各地の教官・学生の交流が積み重ねられていくことを期待しています。

(2) 合宿生活について

研修所、山の家の老朽化は、特に梅雨時ということもあって、いささか快適さに欠けたように思われます。特に、山の家に至る橋のあたりのぬかるみ(溜り水)に靴がはまるなど、一本の外燈があればと恨めしく思わざるをえませんでした。学生たちの飲酒については、急性アルコール中毒の恐れを喚起する以外にはないか、と半ば諦めざるをえなかったのが実情です。それでも、学生たちは、楽しく充実していた、という感想ばかりです。共同授業の持続と発展を祈ります。

第16回九州地区国立大学間合宿共同授業報告

松 本 徃 夫 (山口大学)

授業題目「九州・沖縄の自然と風土」

与えられた上記のテーマは、あまりにも広くて大きいので、ほんのその一部にふれたにすぎない。

種々の地質現象によって陸地が形成されて土地が生まれる。やがて植物が育ち樹木が繁茂し、虫どもが住みつき鳥獣が生活するようになる。そこに居住場所を定めた人びとは、自然と共存しつつ、その風土のなかに文化を創造していく。文化には、衣食住を始め、生活・習慣・言語などいろいろあるが、文化の1つが今回の大テーマの文学であるとする。それ故に、地方や地域の自然や文化を尊重し、大切にしていかなければならない。

以上のような考えをもとに、私自身が撮影した約160枚のスライドをもとに九州各地の自然、とくに山岳や火山の自然について講演した。主なスライドと項目は次の通りである。なお、各県に所在する国立大学が参加していることから、スライドはできるだけ各県にまたがるように配慮した。

宮崎県

若山牧水の歌碑（延岡）

大崩山周辺の山岳と花崗斑岩の岩峰

祖母山・傾山の祖母山火山類からなる岩峰群

福岡県

英彦山修験場と望雲台

長崎県

雲仙火山普賢岳1991年5・6月の火山活動

雲仙火山千々石カルデラと雲仙地溝

雲仙火山普賢岳原生林とその紅葉

大分県

由布岳・鶴見岳

九重火山の生い立ち

九重火山の四季

九重火山の高山植物と高原植物

九重・坊がつる讃歌の始まりと芹洋子歌手

鹿児島県

霧島火山群高千穂峰と御池

始良カルデラと桜島

始良カルデラと開聞岳

トカラ列島の各火山島

沖縄県

無人の火山島硫黄島・グスク火山体直下のキャンプと硫黄岳火口

スライドは以上であるが、合宿期間が雲仙・普賢岳の火山活動中であったことから、これに関係したスライドを多く用いた。また合宿場所が九重山であったことから、九重山関係のスライドも多く用いた。さらに雲仙岳と九重山は同じ山陰火山系列に属するが、九重山と隣合わせで、しかも雲仙、九重とともに中部九州に位置する阿蘇火山は、琉球火山系列に属し火山学的性質を異にする。このことから、阿蘇火山についても多くのスライドをもとに講演した。

なお7月15日には登山が予定されていたが大雨で、十分な登山活動ができなかった。そのため、午前と午後、それぞれ次の講演題目のもとに、多くのスライドを用いて特別の講演を行った。

○楊子江源流：グラタンドン雪山初登頂と学術探検

○南極の自然：第16次南極越冬の記録

意見

○合宿共同授業は、大学間の学生交流、学生・教官の交流等、きわめて有意義である。

○大自然のなかの研修所であるから、室内の授業や講義をやや少なくして、自然観察や自然に親しむ時間をもっと増やした方がよいのではないか。

○学生は、教官の講義を真面目に聞いており、好感がもてた。

合宿共同授業に参加して

生 野 正 剛（長崎大学）

私はたまたま当番校の教務委員長だったために初めてこの合宿共同授業に参加しましたが、ある先生の表現によれば、雨天のための九住登山中止にも拘わらず雨の中を牧の戸まで登った〈 〉付きの馬鹿として、「おもしろかったなあ」というのが率直な感想です。

しかしあらためて現在、強烈に印象に残っているのは、毎夜溢れ出る学生諸君の疾風怒濤のエネルギーと九重の自然の美しさ・爽快さです。その夜ごとのエネルギー発揮については、日本的通過儀礼としての酒盛り会を経なければ異なった大学生間の親和が確保されないという点でやむを得ない面もあります。私としては、一応自立した大人として学生の自律性を尊重し、相当深夜におよばない限りあまり規制はしませんでした。その反面、「自由時間」におけるエネルギー消費が翌日の授業に影響を及ぼしたり、大騒ぎのために睡眠が妨害されたりした学生・教職員がいたことについては、批判を甘受せざるを得ません。例年指摘されているように、「自由時間」をどの程度規制すべきか今後の課題が残ってしまいました。

授業については、今年度はオルガナイザーの努力で、文字通り沖縄も含めた九州の文学と風土とい

う点で統一的でありながら充実した講師陣・講義内容が用意されました。各講師も事前の周知な準備の下に熱意ある講義をされました。また、昨年度に引き続き、学生の自発性を引き出すことをめざして、少人数に分かれての討論などの授業形態が工夫されました。にも拘らず、連夜の夜更かしの体力回復を専ら授業時間に求める諸君が散見されたりして（勿論、夜は夜のこと、翌朝は立ち直っている諸君もいたが）、学生側の対応がいまいちで、せつかくの意図が十全には実現できなかった点もあることは残念です。学生諸君が懇親会で発揮した積極性が授業でも発現されることを今後期待します。

しかし、このように合宿共同授業に「祝祭」としての側面もあったとしても、夜遅くまで教官や他大学の学生と語り合っていたり、最終日の別れの際に相互訪問を約束しあったりしている学生諸君の姿を見ると、所属する大学・学部の垣根を越えた教官・学生の多様な交流がなされたことにより、この合宿授業がまがりなりにもそれぞれの人にとって種々の刺激、啓発の契機となったであろうことがうかがえます。私自身としても、多様な学生に触れることができましたし、また最後の全体討議の際に学生諸君による講師の講義態度・内容への注文を聴いて、あらためて日頃の私自身の講義への反省材料となりました。

最後に、今回の合宿共同授業の運営については、オルガナイザーの先生、当番校（長大）の学生リーダーをはじめとする学生諸君、松本先生に対して深く感謝します。酒盛りを横目にみて、最後まで禁酒に徹されたオルガナイザーの先生が、帰路のバスの中で、あと30分程度で長崎に到着するという時点で、「うまい～」と言って焼酎を飲み始められた姿に、それまでの授業運営についてオルガナイザーの先生に頼り切っていた私としては、運営に関するオルガナイザーの責任感と緊張感をあらためて痛感したものです。また、講義や食事、懇親会のセッティングに走り回わり、酔った他大学生の介抱等を皆が寝静まるまで黙々とやっていた当番校の学生リーダーをはじめとする学生諸君の姿が今でも印象的です。更に、松本先生については、登山中止などによって予定以上に二回もの補講をしていただき、その中では九州の風土を越えてイメージを中国・南極にまで広げていただくなど、獅子奪迅の活躍をしていただきました。

第16回九州地区国立大学間合宿共同授業に参加して

上江田 一 雄（長崎大学）

I. はじめに

「九州・沖縄—その文学と風土—」のメインテーマに基づいた今年の合宿共同授業は、幾つかの問題点はあるが、全体的には成功したと思う。

講師の方々のそれぞれの持ち味を生かした講義が、印象に残っている。最終日の全体討論における学生達の活発で真剣かつ熱心な討議を聞いて、学問の何たるかを学生から教えられた思いがした。さらに、連日の遅くまでの交流にも係らず病人が出なかったこと、最終日の朝の機敏な掃除・後片付けなどが思い出される。

今年の合宿共同授業が成功した背景には、参加した各大学の全ての学生、職員、教官の努力があったと思う。

合宿共同授業が、今後、益々活発になることを願って、以下の項目では、気付いた幾つかの問題点を指摘したい。

II. 共同授業について

(1) 講義のコマ数について

1コマの講義では、持ち時間のかなりが序論に費やされて、講義が上滑りになり、「文学と風土」とは切り離せないそれぞれの時代の人々の物の見方・考え方についての本質的な話ができなかったと思う。講師数を半分に減らし、一人の持ちコマ数を2コマにして、ゆとりがあり、かつ中身の濃い講義ができることを期待したい。

(2) 講師の宿泊について

講師はできるだけ全日程（4泊5日）宿泊して、寝食を共にしながら学生と交流し、講義の中身を授業以外の場で深めて頂きたい。

(3) フォーラムの在り方について

最終日の全体討議で学生からも同じ発言が出たが、フォーラムの討論ではフリートーキングの形で自由な討議を保障して頂きたい。討論を通して、学生は何かを学ぶのではないだろうか。

III. 合宿生活について

(1) 時期について

7月の中旬は梅雨の末期で、雨に閉じ込められるのは予想できる。今回も1日間を除いて連日雨で、登山も中止になり、参加者全員ストレスが溜ったと思う。九重の美しい自然の地での合宿共同授業を考えると、時期を変更したらと思う。すばらしい自然に親しみながらの合宿生活を確保するためには、8月1日からの時期にしてはどうだろうか。

(2) 環境整備について

研修所と山の家間の道路を整備し、途中の橋の近くに街灯を設置して頂きたい。

(3) 教職員について

一部教職員について思うことであるが、悪乗りして学生達の一気飲みに加わったのは残念であった。そういう小生もかなり破目はずしたが。

IV. おわりに

勝手なことを書いてきたが、振り返ってみると長いようで短かった5日間であった。参加者全員が写っている記念写真を見ながら思うことは、また機会があれば喜んで参加したいということである。

手作りポスター

若木 太一 (長崎大学)

「そのポスター、いただけませんか。記念にしたいのですが」

食堂の壁にはっていたポスターを剥していたらそんな声がかかった。私はこの時、内心ヤッターと、学生なみに飛び上りたい程嬉しさがこみあげてきた。今回の合宿共同授業は成功した、とこの時確信した。あと片づけでへトへトだったが、急に元気づいたのだ。どの大学の方だったか失念したが、お礼申し上げたい。

少々大きくなるが、実のところ私はこのポスターにかけていた。つまり、誰かがもらってくれたら「成功」した証拠だと。その通りになったわけで、これは念力が通じたらしいのだ。「九州・沖縄—その文学と風土—」というメインテーマにそって、フォーラムに参加して下さる先生方への依頼や各ジャンルごとに御活躍の先生方との交渉など、すでに半年前から準備を進めていた。当初、学生運動対策的に始められたこの共同合宿授業も、今回で16年目を数え、もはや時代の変化の中で質的に大きく変わろうとしている。だから当番校としては、すっきりとテーマをきわだたせ、地盤沈下している地方国立大学の、しかも教養部ないし教養教育の存亡の危機的状況からの脱皮をめざして、といえどもこれも大きさなど言われそうだが、長崎大学としては、現在その分野で活躍されている最高の講師陣をメンバーに揃えて、このテーマに臨もうと計画していたのである。そのころ『AERA』に出た京都大学理学部のすさんだ風景と「頭脳のカンオケ国立大学」という言葉が、われわれ地方国立大学の今後を象徴しているように思え、これはいかんと思っていたからでもある。福田先生は、そのことをふまえ、九州大学での打合せ会でポスターを作る事を表明されていた。やがて講師の先生方から写真を拝借した。ところが、ポスター製作の予算がどうしてもとれなかった。一時自腹を切っても作ろうかとも話したが、それは思いとどまった。足りない予算を工夫してこそ価値あるものになるだろうと、工学部の最新のコピー機を借りて手作りした次第である。

やさしい微笑をたたえられた森崎先生、ブライアン、荒木、昆のお人柄のよく表れた三先生の写真。このフォーラムの先生方を中心にして、今回のすさまじいスケジュールに挑んで下さった各講師の先生方が並ぶ。

ほとんど旅費だけの手当てで、しかも多忙な夏の時間をさいて、参加して下さった先生方に心からお礼を申し上げたい。学生たちとナマのふれあいが出来る時間がもてるという、ただそのために来てくださったと思う。「先生たちはほとんどサービス業ですね」といわれた森崎先生のことばが心に残る。「このクソ暑い、クソ忙しい時に山に集まるバカども」と、やや自嘲的に、ナルシズム的に評した九大の花田先生の言葉は、学生と教職員のわれわれ全参加者の気持を代弁し、満足させてくれるものだった。「九州・沖縄—その文学と風土—」というこのテーマのために、風景や歌枕、芸能と伝承文学、海外交流と日本の文学、俳壇史や紀行文の展開、「五足の靴」のもたらした影響と地方文壇の様相、それに「伝統と可能性」を問うフォーラム、さらには自然と風土という自然科学的アプローチも準備されていた。部厚い資料集が作られ、先生方は90分をギリギリまで使って講義された。フォーラムは中休みはあったが延々4時間である。これについて、「長過ぎる」「質問の時間がもっとほしい」等のアンケートによる学生の意見は、今後考えるべき指摘だろう。ただ、「ふだんの講義と変わらなかった」とは、いったいどこを見ているのだと言いたい。酒をのむのは結構。何時までも語り明かしてもいい。新しい友人をつくる絶好の機会だ。ただし、睡眠時間はとれなくとも、講義中には寝るな。このことは今後のためにも強調しておきたい。

のんだくれていても可愛い学生たち。「イッキ、イッキ。こんなもんでドウダ！」エネルギーの噴出に圧倒されたが、心地よかった6日間だった。研究室のドアに貼って、取りはずすのがもったいないこの手作りポスター。夏休みも終りに近づいた今日、思い切ってははずそうと思う。

学生の皆さん、先生方や事務の皆さん。楽しい、いい夏でしたね。どうもありがとうございました。

(1991年8月26日)



丸木俊『シーサー』

4. 合宿共同授業に関する参加学生のアンケートの回答 (最終日実施)

	回収率	98.9% (86/87)
1. この共同授業に参加することを決めたまっかけは何ですか。		回答率 (%)
(1) 自分から進んで参加した。		65.1
(2) 友人(たち)にすすめられて参加した。		20.9
(3) 大学(教官・事務官)にすすめられて参加した。		5.8
(4) その他		8.1
2. この共同授業にどの程度期待していましたか。		
(1) 非常に期待していた。		17.4
(2) かなり期待していた。		23.3
(3) ある程度期待していた。		48.8
(4) あまり期待していなかった。		10.5
3. この共同授業を終わろうとしている今、あなたはどの程度満足していますか。		
(1) 非常に満足している。		30.2
(2) かなり満足している。		47.7
(3) やや不満である。		18.6
(4) 全く不満である。		2.3
4. この共同授業の開催に適切な時期について意見を述べてください。		
(1) 夏季休業に入る7月10日過ぎ		94.2
(2) 10月初め		1.2
(3) 10月中旬		1.2
(4) 12月下旬		0.0
(5) その他		3.5
5. 日程(期間)は今回は5日間でしたが、一般に何日くらいが適当と思いますか。		
(1) 3日間程度		7.0
(2) 4日間程度		24.4
(3) 5日間程度		62.8
(4) その他		5.8

5. 参加学生の感想

合宿ということで、学生と教官と一緒に生活するので、講義を受けたままほったらかしということにならず後で先生と話をする機会が作れるので、大学での講義よりも有意義なものとする事ができたと思う。そういう意味で「講義についての討議」の時間は非常に意味があったと思う。もっと多くしてもいいかも知れない。

フォーラムではいろいろな立場の人が同じ問題について発言をされるので、聞く側としては、一度にいろいろな観点を得られるのが有意義であった。

一つ注文をつけるとすれば、先生方の最初のお話をもっと短くして、学生と先生方との対話の時間を沢山とってくれた方がより一層充実したものが得られたのではないかと思う。

登山は牧ノ戸峠までしか行けなかったけど、他大学の人々と交流を深めることができ良かった。

地熱発電所見学は、一見テーマと関係ないようだが、実は九州の「火の国」という風土の一端を垣間見たような気がして僕はとてもよかったと思う。来年以降も発電所見学はした方がいいと思った。

(九州大・男)

全体的にとっても良かったと思いましたが、もう少し、講義中に生徒と先生の意見のやりとりができるようにすれば、より良くなるのにと思いました。

(福岡教育大・女)

講義はわかりやすいものが少なかった。でもこれから文学に親しもうというきっかけがつかめた講義や討議があったのでよかった。また自然の中でゆっくり自然を見て楽しみ、創作しようかなとも思えるようになった。

フォーラムはあんまり意見が飛び交わなかった(一方的であった)ように思う。

登山は予定通りできなかったのが本当に残念であった。牧の戸峠までは舗装道路だけであったのでつまらなかった。

(九州芸工大・男)

私は九工大の学生ですが、参加者が2名だったので、はじめのうちは友達もいなくてとてもさみしい思いをしました。しかしながら、時間がたつにつれて友達もでき、親しむことができました。私はこの共同合宿授業に参加した理由の1つに「いろんな大学の友達をつくりたい」という思いがあった

ので、この目的は達成することができました。あらためて“友情”という2文字の意味を認識しました。

特別講義では山口大学の松本先生の貴重なおはなしを聞くことができ大変ためになりました。私は大酒飲みの先生は嫌いなのですが、松本先生は親しみの持てる普通のおじさんのような気がして好感が持てました。立派な先生だと思いました。

お願いですが、これからもこの合宿をずっとずっと続けていって下さい。まとまりのない感想文ですみません。楽しい思い出ができました。

(九州工大・男)

(1) 今回のテーマは「文学」だったので講義の内容はあまり興味がなかった。話を聞いていても興味が無いので頭が受けつけなくて、段々眠たくなってきて、いつのまにか寝てしまっているというパターンが多かった。フォーラムははっきり言って時間が長すぎた。これは全体にいえることだが、話が上手な人と下手な人との格差がありすぎたと思う。

(2) みんな元気だ。まさか初日からあんなに飲むとは思わなかった。「消灯就寝と言う4文字を忘れるな」という長大の先生の言葉を聞いて、てっきり10時30分に電気を消してその後みんなこそそと出て来てかくれて飲むと思っていたが、初日の夜そうそう先生から「自分にも一杯くれ」と言って来たのを見て正直言ってびっくりした。「大学だなあ」とつくづく思った。

(3) 参加費をもう少し増やすか、酒代を減らすかして食事をもっと良いのにしてもらいたかった。他大学の友達もできたし、先生達とも仲良くなってよかった。はっきり言って自分は友達を作るためにここに来たので目標を達したと思っている。本当にたった9000円でこんないい体験が出来たことに満足している。

(佐賀大・男)

「文学」と聞くだけで逃げてしまいたくなる程、今回のテーマは私にとって嫌なものでしたが、一概に「文学」と言っても地理的、歴史的など、色々な面からの見方があるのだなと感じました。

それぞれの講義で、文学を色々な面からとらえることによって、「文学」への苦手意識が減ったように思います。

生活面として、夜に飲み会等が激しいということを目にして、不安でしたが、思っていた程ではなかったもので、安心すると同時に、少々もの足りなさを感じています。

本来なら、受けるはずもない九州各大学の先生方の講義に参加でき、他の大学に友人も沢山でき、本当に素晴らしい企画だと思います。これから、回数を増やして、もっと多くの人々にこのような機

会を与えて欲しいと思います。

討議の人数を減らして（小グループ等を沢山つくって）もっと意見交換ができるようにしたらいかがでしょうか。今回人数が多すぎて、発表する人はするけど、しない人はただ聞いているだけということが多かったように思います。

素晴らしい経験を有難うございました。

（熊本大・女）

(1) 講義では沖縄について様々なことを学びました。

経済学部なので久しぶりに文学関係の勉強ができました。

フォーラムでは森崎先生の話に感動しました。

もっといろいろお話を聞きたかったです。

登山はできなくて残念でした。

その他とてもすばらしいスライドをみることでよかったですと思います。

(2) 女の子はみんな年下だったけど、関係なく仲良く楽しく過ごせました。沖縄の人や同じ九州でもいままで友達にいない県の人から日常生活やその他知らなかった事を知ることができてよかったです。いろんな人がいて、それぞれ様々な環境下で生きているんだなあと思いました。久しぶりの長い合宿生活で少し疲れしました。

(3) テーマについてですが、もう少し身近なことでtimelyなテーマがよいと思いました。

沖縄のことについて中心的に考えてきましたが、沖縄のことだけでなくその他世間で問題になっている事でも実際自分の身近なことにならなければ考えたりしないし理解もできないものだと思います。

生の声というものは真実性や迫力があると思いました。

これからも“生の声”というものを聞く機会がもっとできればいいと思いました。

（大分大・女）

講義については、いつもは退屈して聞いていたりねむくなったりしているんですが、この合宿授業では、そういうこともなく、いろんな勉強をさせていただいたと思います。またフォーラムでは、有名な作家の方や、偉大な方々の話が聞け、とてもいい勉強になりました。ブライアンさんの話では、とても考えさせられた面があり、その点の考え方がかわったと思います。登山では、あいにくの雨のために登れなかったのも、大変残念に思います。いつか久住山などに登りに行きたいと思います。

この合宿でたくさんの方の人と知り合いになれて、またその地方の事など、知らなかったことを

聞けてとてもおもしろかったです。

皆さんの考え方がしっかりしているのには、とても驚きました。

毎晩のように皆さんが楽しんでいて「あーこういうことをすることも大切だな」と思いました。

また来年もすばらしい合宿を開いていただきたいと思います。

(宮崎大・女)

この合宿共同授業で感じた最大のことは、「出会いの不思議さ」である。今まで何の縁もなかった大学生達が、「単位が足りない」等のささいな理由のため、いきなり出会ってしまう。実に不思議だ。でも、アドレス帳に書かれた住所のうち今後、又書くのはいくつだろう。まあ、そんなことはどうでもいいのかも。5日間楽しかったことはたしかなのだから。

フォーラムについて感じたことがある。講師の先生方の話にあまり接点がなかった。これではフォーラムの意味がないのではなかろうか。もっとテーマをしぼって司会に強権を与え、もう少し時間を延ばした方がいいのではないか。はっきり言って「フォーラム」はメインなのだから、もっと充実させるべきなのではなかろうか。

生活について言うと、とても良かった。とても許容能力のある人々がそろっていたと思う。飲みたい人は飲み、飲みたくない人は飲まない。寝たい人は寝、寝たくない人は起きておく。自己と違う者を認めようとするこの社会においてこのような考え方ができるのはすばらしいと思う。

(鹿児島大・女)

始まるまでは、“4泊5日なんて絶対長すぎて死んでしまう。”と思ってたけど、全てを終えてみると帰りたくないような気がする。講義なんか、普通の大学生活の中では、出席するだけで聞いてなんかいないけど、この合宿授業では聞かずにはいられない大変人をひきつける内容だったので思わず聞きってしまった。最後の夜も一生思い出に残ることだろう。

(鹿屋体育大・女)

山と呼べるようなものがない土地から来たこともあって、登山にはものすごく期待してきたが、天候のため中止になったことはとても残念だった。けれども雨の中、道端に咲く高山植物を見ながらの牧の戸峠までの散策は、べちゃべちゃでつらかったもののとてもたのしかった。

講義、フォーラムについても、それなり満足できるものだった。ただ、合宿共同授業にかけるテーマについての討議(例えば文学と風土ならそれについてのひとりひとりのそれぞれの抱いている考え方についての意見交換)を行なってほしいと思ったし、フォーラムでも紙片にかいて質問する形式で

はなく、じかに口頭で質問するという形にしてくれたならもっとよかったと思う。

最後に学生どうしの交流会については、やりすぎではないかと思った。たしかに、たのしめる人間ならいいかもしれないが、眠っている人とかに対する配慮もなくほっとけばいつまでも飲みさわぐというのはやめてほしいと思った。時間外にさわぐなら小松地獄にでも行ってほしい。

(琉球大・女)

大学での講義ではどうしても教授といっしょに勉強しているという感じがもてないのに対し、この授業では先生たち(教授というカンジでなく)が1人1人に目を配って話をしてくれているように思いました。しかしはっきりいって“連夜の酒盛”で第3日目からの授業は文学を学ぶというより先生の人物観察になってしまいました。居眠りも多かったし……。

フォーラムに至ってはもう睡魔が背中にとりついてまったく、先生方には失礼なことをしたと反省しました。でも少しずつかいま聞いた話の中から夏期休業中に読んでみたい本がいくつか増えました。登山…あいにくの雨で発電所まででせっかくいったのにここでも力がはいってなくてやる気のなさを感じた—せっかくここまできたのに—しかし、自由参加の牧の戸峠までの山登りはすごく楽しく行けた。

私としては講義、単位よりも“人間関係”を広げたい(教授も含めて)という風な気持ちがつよかったので、先生方には申しわけないかもしれないけれどやはりこれでよかったのだと思いました。—講義についていえないのでやはり単位をもらう資格はないようです—ここにきて本当にたくさんの「バカ」に会いました。みんなすごく素敵で自分も他の人にとって「バカ」の1人としてうつっていればとてもうれしく思います。

講義の時のほくねつしたふんいきに思わず涙が出てしまいました。

(長崎大・女)



O·MO·I·DE

北原白秋『思ひ出』表紙画

IV. 参加者名簿

① 教 職 員	熊 本 大 学	事 務 官 平 田 勉
	教 授 首 藤 基 澄	長 崎 大 学
九 州 大 学	教 授 荒 木 尚	教 養 部 長 三 村 珪 一
教 養 部 長 原 田 溥	講 師 松 瀬 憲 司	教 授 福 田 益 和
助 教 授 花 田 俊 典	事 務 官 東 坂 裕 之	教 授 若 木 太 一
助 手 齊 藤 篤 司	大 分 大 学	教 授 生 野 正 剛
教 務 掛 長 上 原 広 繁	講 師 妹 尾 好 信	助 教 授 上 江 田 一 雄
事 務 官 関 武 治	事 務 官 工 藤 達 生	教 務 係 長 溝 上 雅 敏
福 岡 教 育 大 学	宮 崎 大 学	事 務 官 山 本 一 吉
教 授 昆 豊	教 授 岡 林 稔	事 務 官 林 田 勉
教 授 笠 榮 治	事 務 官 奥 幸 弘	事 務 官 吉 田 恭 二
教 授 板 坂 耀 子	鹿 児 島 大 学	事 務 官 小 川 由 紀
九 州 芸 術 工 科 大 学	教 授 大 内 初 夫	技 官 高 見 正 明
助 教 授 太 田 昇 一	助 教 授 大 嶋 眞 紀	山 口 大 学
九 州 工 業 大 学	事 務 官 長 野 俊 児	松 本 徳 夫
教 授 石 川 八 朗	鹿 屋 体 育 大 学	作 家
佐 賀 大 学	助 教 授 長 友 武	森 崎 和 江
助 教 授 五 十 嵐 勉	琉 球 大 学	長 崎 市 国 際 課 嘱 託
事 務 官 江 崎 浩	助 教 授 関 根 賢 司	ブライアン・パークガフニ

② 学 生	6 滝 海 (工)	14 藤 本 浩 介 (理)
	7 友 田 真 一 郎 (工)	福 岡 教 育 大 学 (1名)
九 州 大 学 (14名)	8 田 中 昭 成 (工)	1 日 卷 律 子 (教 育)
1 小 林 由 美 子 (文)	9 田 中 慶 浩 (工)	九 州 芸 術 工 科 大 学 (5名)
2 武 藤 隆 博 (法)	10 守 中 隆 史 (工)	1 岩 本 泰 一 (芸 術)
3 山 田 欣 也 (法)	11 高 野 直 人 (理)	2 横 地 義 照 (芸 術)
4 阪 本 任 範 (経 済)	12 牧 野 康 則 (理)	3 大 和 純 (芸 術)
5 高 口 紀 貴 (工)	13 春 野 智 哉 (法)	4 岡 昌 史 (芸 術)

5 河野洋一(芸術)	大分大学(5名)	1 金子友美(法文)
九州工業大学(2名)	1 斎藤明子(教育)	2 大嶺可代(法文)
1 松野誠志(工)	2 恵良孝秀(経済)	3 玉城博一(法文)
2 多々野明子(情報工)	3 立野浩行(工)	4 西之原千鶴(法文)
佐賀大学(10名)	4 鶴田佳代(経済)	5 山本 薫(理)
1 出穂美和(農)	5 安東亜希子(経済)	6 伊藤和実(理)
2 松井賀奈子(農)	宮崎大学(3名)	7 松本大樹(理)
3 田中 光(農)	1 吉田真由美(教育)	8 大田晃代(医)
4 古家能成(農)	2 村山真紀子(教育)	9 小西隆之(工)
5 池田友美(経)	3 森本恵美(教育)	10 神谷寿美(工)
6 梶島律子(経)	鹿児島大学(10名)	11 辛島直美(工)
7 河原成考(教育)	1 藤本貴大(教育)	12 竹村友恵(工)
8 倉本 哲(教育)	2 寺崎倫央(教育)	13 宮良 透(工)
9 相良保喜(理工)	3 芝野将年(農)	14 石川毅王(農)
10 西川 潤(理工)	4 長尾信洋(農)	長崎大学(10名)
熊本大学(10名)	5 狩野麻里子(理)	1 泉 裕司(経済)
1 増井丈浩(工)	6 上妻由佳(工)	2 新野大介(医)
2 丸尾勝也(工)	7 前原知恵美(工)	3 後藤真吾(工)
3 船越真紀(教育)	8 松井絵里(工)	4 岡本麗子(教育)
4 中原田聖子(教育)	9 桑野 薫(農)	5 衛本憲子(薬)
5 高木伸幸(教育)	10 櫻内香織(農)	6 佐藤 恵(薬)
6 古川智一朗(工)	鹿屋体育大学(3名)	7 成山吉史(工)
7 山口修平(工)	1 久野ルミ(体育)	8 市橋憲幸(工)
8 岩堀秀紀(工)	2 矢野留美(体育)	9 福田真奈美(教育)
9 松村智行(文)	3 山口絵美(体育)	10 小山郁子(薬)
10 林 江利子(工)	琉球大学(14名)	

V. 第16回合宿共同授業事務日程

年 月 日	事 項
平成2年11月15日～16日	合宿共同授業委員会（九州地区国立大学教養部長会議）
11月27日	企画委員会開催通知
12月13日	企画委員会
12月19日	講義題目等の推薦依頼
3年2月1日	講義題目等の調整・決定依頼（当番大学へ）
2月22日	講義等担当教官の推薦依頼及び「講義要旨」の原稿依頼
2月22日	合宿共同授業経費（予算要求）について照会
3月27日	実施委員会開催通知
4月上旬	文部省に予算要求書を提出
4月15日	実施委員会
4月22日	実施（学生募集等）について通知
5月31日	参加者名簿の提出締切
7月12日～16日	実施